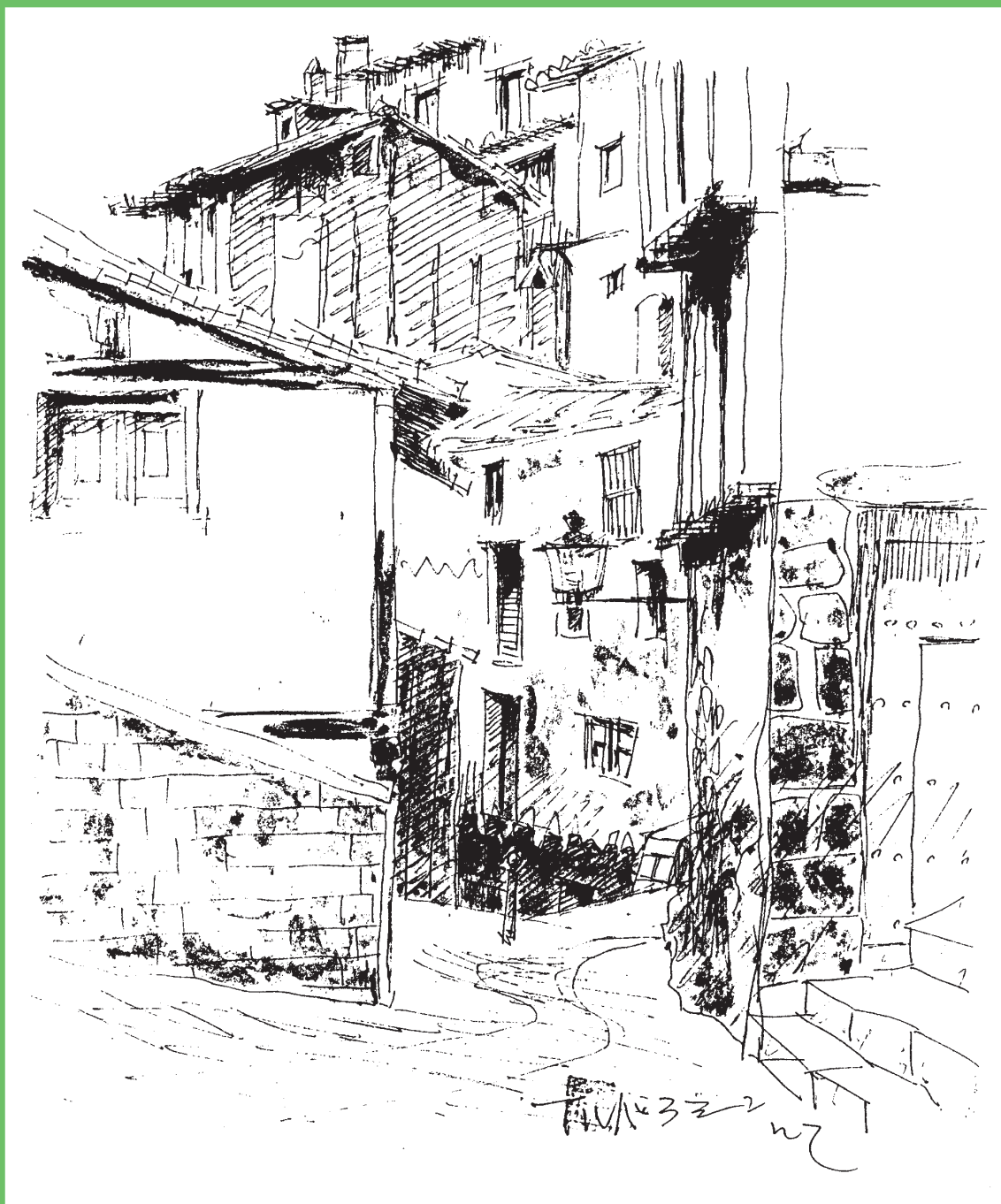


やまさき文化

' 07 - 3 * No.26



岩栗市山崎文化協会

穴粟の品格

穴粟市山崎文化協会会長 藤井 慧 乗

平成十八年の流行語は「品格」と選ばれた。藤原正彦氏の書から出た言葉であることはご承知の通りである。二百十五万部も売上げたとは驚きだ。最近の政府の対内外の失策に業を煮やした国民の歯痒い思いからの快哉の心であろう。

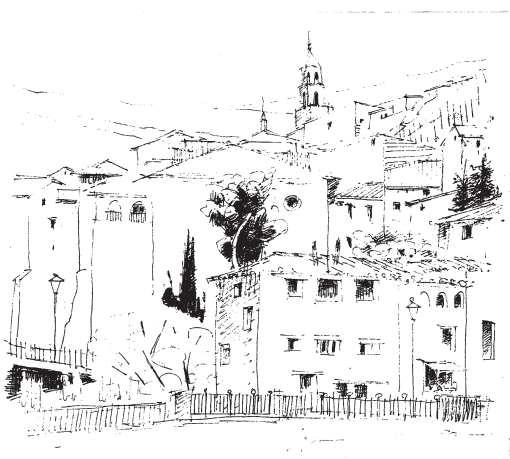
今の日本の品格喪失を氏の『国家の品格』に尋ねると、教育の失格と答えている。即ち戦後の日本の教育は米国の自由主義とロシアの人権主義によって、日本の誇りと自信は地に落ちたと主張している。では過去の日本が世界にプライドを保ち得たのは、その時代の官僚、財界人、学者そして一般庶民に至るまで高い教養と文化を持っていたからとする。

教養とか文化は、普段は役に立たない事のように考えられているが、そこにこそ本当の見識とか大局からの観点が生まれて来る。それは読書による智慧だと断言し、これが日本の品格の源泉と論じている。

ここで穴粟の品格について書いて見たい。私はその資料として、山崎町神谷の森本一二氏の碑文研究の文集を拝見すると、この標題の語りたいすべてが書かれてあるのを知り得たのである。その中の一例だけを紹介してみたい。

山崎町河東地区中村の南入口山裾に長瀬保先生の顕彰碑が現存している。先生は山崎藩士の息として生まれ藩主の近習となり、幼君の師として学芸武芸を講じておられる。又神官僧侶の指導に勉められていたが其後碑のある中村に居住して塾を開設し村内外の志ある青年百余名に和漢の書を講じ、悪遊に走る事なく正道に導くために謡曲まで授けておられた。清貧をかえりみず、清廉高潔の余生を送られ八十六才で逝去されている。師の教えを頂く塾生達、後に山崎町内外の行政の長となり或いは財界の長老として今もおその名高い人達が多い。教育界においては当時の高等学校を経て東大他各地の大学に進学する者も輩出している。大正二年四月教えを受けた塾生百余名、子爵本多藩主を筆頭に師の徳を敬慕して立派な碑を建立している。

この様な各師が徳川末期より大正にかけて郡内各村に居住され、塾、寺子屋を開いては、子弟の精神・勉学を指導しておられた。その心が古き良き穴粟の品格が養われたと信ずると共に将来の穴粟の心を考えたい。



目次

シベリアに消ゆ	荒木 俊介	1
「誠」なる理科学教育に向けて	田中 良晴	10
短 歌	稲村 幸子	12
俳 句	三浦 ゆき	14
身近な歴史遺物の発掘	森本 一二	15
シーボルトの木	井口 武一	16
新潮会五十五年の歩み	伊藤 勉	16
「穴粟の碁」を尋ねて	竹添 和彦	17
山崎茶華道協会の活動と私	北川 泰子	17
中国へ旅して、思ったこと	尾崎 隆繁	18
小学校の連合音楽会を聴いて	塚田 美紀	18
民謡との出会い	中野みつゑ	19
水の都ベネツィア	福岡 久藏	19
古いこと新しいこと味のこと	石野 和雄	20
私と詩吟	小川 賀尉	20
「春」待つところ	藤井 七代	21
和太鼓教室に入って	大久保愛海	21
苔玉づくり	田口 實	22
地域文化に貢献する平成会	稲用 博史	22
和の歌声	菅原 恵理	23
川柳破丸会	朝見 愛	23
追 悼 記	山田 醉仙	23
事務局だより	福岡 久藏	24
編集後記	富和 昭弘	24
表紙画／カット／	前野 良造	26
表紙題字	浅田 耕三	26
	福岡 久藏	26
	荒木 俊介	26

シベリアに消ゆ

山崎文学会 荒木俊介

“明治は遠くなりけり”という言葉があるが、その明治、大正期に中国東北部（旧満州）からシベリアにかけて活躍した一人の日本人女性の物語である。九州天草の出身で名前を山本菊子といった。八才の時朝鮮の日本人料亭の養女として売られて行った。何も分からぬ年頃に貧困のため異国の花柳界に身を投じる運命にあった。

明治二十七、八年の日清戦争に勝利した日本は朝鮮に於ける日本の主権を清国に認めさせ、それを契機に日本人の朝鮮への経済進出が始まるのだが、菊子が朝鮮に渡ったのは丁度その頃のことである。

菊子の様な女性は、大陸に近い九州から山口県にかけて数多くいた。総て貧困のためである。養女とは名ばかりで、年頃になると酒席に侍らされたことは容易に想像される。

天性の美貌の上に語学が達者で人を引き付ける社交性があつたから十八才頃には忽ち花柳界の花形になった。その結果、朝鮮王朝のさる大官の妾におさまった。

このことの背景には当時の朝鮮半島をめぐる日本とロシアの勢力争いや彼女の後半生の活躍などから考えて軍部の策動があつたのではないかと思われる。

日清戦争の結果、朝鮮に於ける日本の主権を清国に認めさせることは出来たものの朝鮮民衆の間には主権を侵害されるとして排日運動が頻発していたし、殊に李王朝内にはロシアを後盾とする閔妃王妃と親日派の国王の実父大君院の二派に分かれて争っていた。

この事態を憂慮した軍部は、閔妃王妃を暗殺して大君院を擁し、親日派の金弘集政権を樹立した。

ところが、半年も経たぬ中に閔妃の夫君高宗帝は、再びロシアを後盾として

金弘集を殺害して親口政権を成立させた。

結果として日本は血をもって得た朝鮮に於ける主権は後退し、絶えずその親口政権の内情を探る必要に迫られていた。こうした時期に菊子は李王朝の大官の妾となつたのである。

その後もロシアの中国東北部（旧満州）への南下政策は露骨になって行った。先ず始めはフランス・ドイツを誘つての三国干渉である。その結果、成功報酬として予ねての宿願であつた大連、旅順の租借と旅順、長春間の鉄道施設の建設の権益を得た。

それだけに止まらなかつた。北京に義和団事件が発生すると連合国の一員として出兵するが、一ヶ月ばかりの戦闘で事件は収まり、連合軍は解散、撤兵する中で、ロシアのみは、言を左右して撤兵しようとしなかつた。それどころか、却つて増強の気配すらある。

危機を感じた日本は遂に戦争に突入することになるが結果は日本の勝利に終わり、日本はロシアから長春、旅順間の鉄道の権利と清国からは、大連、旅順の租借権を得ることになり、日本の満州への経済進出が始まるのである。

菊子が満州に姿を見せるのはその頃のことである。最早朝鮮に於ける諜報活動の必要性は薄れたことと何よりも彼女の外向的な性格が新しく開かれた満州という新天地に向かわせたものと思われる。

当時の満州といえば、土地は清国のものだが、鉄道の経営権は、旅順、長春間は日本が、北満を東西に走る東支鉄道はロシアが持つてその沿線の周辺は、それぞれが守備隊を駐留させて警備に当たるといふ複雑な状況であつた。だから一步沿線を離れると、そこは中国領だが、衰微しかけた清朝には最早統制力はなく、馬賊が横行するといった状態で治安は乱れていた。しかし、それは辺境の事情で旅順、長春間の鉄道も南満州鉄道と改名されて沿線の奉天、旅順、大連といった大都市の治安はよく、日本人の経済進出は順調に進んでいた。

そうした気運も菊子を満州に引き寄せた要因であつたことは間違いない。満州に渡つて先ず彼女の名が広く知られる様になるのは済南の城將斬雲鵬の妾となつてからである。やはり天性の美貌と人を引き寄せる魅力のある社交性

のためであろう。名も瑞玉菊と改めていた。

この時期菊子の動向は、余りよく分からない。斬雲鵬が軍事や治安に関わる職業だけに諜報面で日本の軍部に利用されたことは充分考えられる。

因みに当時の満州一帯には大陸に夢見る日本人が多くいた。俗に大陸浪人といわれる男たちで、大アジア主義を唱え、満蒙独立を叫ぶ日本の壮士たちである。その代表的な人物が内田良平とか頭山滿といった男たちである。

こうした大陸浪人の外に少し毛色の変わった男に伊藤順之助（張宗授將軍）、小日向白朗（尚旭東）、松本要之助（小天龍）といった馬賊の頭目もいたのである。

その間にも世界の情勢は目まぐるしく変わっていた。大正三年六月、第一次世界大戦が起きるのだが、大戦が以外に長びく中に先の日露戦争で痛手を受けていたロシアは更に国力の衰微を招いて一九一七年（大正六年）一月十二日遂に三百有余年続いたロマノフ王朝はニコライ二世退位によって滅亡、ケレンスキー臨時政府が組織される。しかし、それも束の間、レーニンやトロツキーに率いられたボルシェビキ（多数派）がボルシェビキ左派政府を樹立してドイツと単独講話を結ぶこととなる。だが、この左派政権に対抗する反革命統一政府がオムスクに樹立されることによってロシアは内戦状態に陥る。

左派政権の樹立を憂慮していた日米英佛の連合国は、これを好機として反革命統一政府に於いて新たに指導者となったコルチャック將軍を援助すべくシベリア出兵に踏み切った。

しかし、日本だけは外に意図があった。むしろ日本にとってはその意図の方が重要であった。それは、これを好機として満州、シベリア一帯を制圧し、日本海を内海とするという宏大な構想であった。この構想は、日本国内の有識者は勿論所謂大陸浪人と呼ばれた壮士達の間にも彷彿として上り、ロシアから譲渡されて改名した南満州鉄道の経営も順調に進まず、中国人の抗日運動に悩まされていた日本にとっては神風の様な助けを齎した。

その構想の中枢には日本軍の支援する蒙古系コサック騎兵中尉のセミョーノフを予定していた。セミョーノフは、ロシア崩壊と同時に蒙古に帰り、内蒙古

の独立を計画していたのである。

菊子も日本人としてこの構想に心踊らされた一人であった。菊子が第十二師団の前に慰安婦を志願して現われたのは、その頃で新宝鎮という街で酒場のマダムとして働いていた。

しかし、軍部は彼女の存在をよく知っていた。永年の北満生活に於いて得た広い人脈やロシア語も話せる語学力などからむしろ民間の諜報員として利用することにした。

齊南の城將斬雲鵬のもとを何時去ったかはよく分からないが、その後大連、旅順、奉天といった大都市を転々としたが、その間料亭や酒場つとめもしたであろうが、反面軍部との関係を利用して軍に物資を納入するという男まさりの仕事もした。こうした様々な人生経験もあって、持ち前の社交性に加え俠気も芽生え始めていた。哀れな同僚の日本女性に接すると救いの手を差し伸べた。日本人だけではなかった。中国人が高慢な日本人に侮辱されているのを見かけると義憤を感じて日本人を厳しく責めた。そうした時は自分が中国人である様な錯覚に陥るのである。

事実流暢な中国語を話している時などは自分が日本人であることを忘れていた。

その頃の菊子は北満だけでなく、九州人の多く住むニコラエフスク、ウラジオストクなどにも旅をした。愛暉の対岸ブラゴエチンスクから黒龍江を遡航する船を利用すれば容易に旅することが出来るのである。

そうした街々には必ず中国人、韓国人に交って多くの日本人が住んでいた。又、たまたま船中などで偶然にも傍らで九州天草の出身だといって話している者に出会うことがある。そうした時は菊子は、その仲間には加わらず傍らでそっとその天草訛りの話を一言漏らさず聞いていた。

朝鮮から満州へと渡って既に廿余年の歳月が流れている。日常はすっかり中国人になり切った様に思っているが流石にそうした時は遙か遠い幼い頃、天草の浜辺で友達と貝拾いに興じた光景がかすかな潮騒の音と共に蘇って懐かしさの余り、その夜は棧楼（宿屋）の一室で暗いランプの下で酒を呷って憂いを紛らわした。

親に売られた身、今更日本に帰る気など更々ないと思いつながら気持ちには中国人と日本人の間を揺れ動いていた。

日米英佛の連合国がシベリアに出兵した当初は、オムスクの反革命統一政府はコルチャック將軍のもとに連合国の財政支援を受けてボルシェビキ政權の労兵人民軍所謂「赤軍」と互角に戦っていた。

ところがパリ講和會議も終えて国内体制を整えると、赤軍はオムスクのコルチャック軍に対して反撃に転じ、そのためオムスクは陥落寸前まで追い詰められていた。

連合国がシベリアに出兵したのが大正七年八月、その翌々年の九年一月、僅か一年半ばかり後にオムスクは遂に陥落するのだが、この問題となったのがコルチャック政權が所有していた金貨金塊を含むロマノフ王朝の莫大な遺産であった。

この遺産はコルチャック政權に協力していたチェツク軍の手によってシベリア鉄道を通じてチタにあるセミョーノ政權のもとへ送られていたのである。チェツク軍というのはロシアの降伏を機にチェツク・ソロバキアの独立を目指してコルチャックと共にボルシェビキ政權と闘っていた軍団である。

日本の時の大蔵大臣高橋是清はこの財宝に重大な関心を持っていた。コルチャック政權には軍需物資の援助などで多大な債權を持っていたからである。しかし、若しこれを日本が入手すれば国際問題化すると反対する外務省を押し切って高橋はこれを手に入れるため、オムスク、チタの特務機関に財宝の輸送途上の情報に全力を挙げて集める様命じた。

日本軍の抱えるもう一つの大きな問題は、西シベリアから北滿の東支鉄道沿線にかけてのボルシェビキ派のシンパの蠢動であった。ボルシェビキ政權成立直後は東支鉄道沿線は一時ボルシェビキ派の兵士によって占拠された状態になっていたが、セミョーノフの蜂起によって討掃されていた。それがオムスクの陥落後、再び勢いを得てゲリラ的に日本軍を悩ませていたのである。日本軍の行動が事前に洩れて多大な損害を蒙っていた。日本軍はこのシンパの動向に関する情報も喉から手が出る程欲しかったのである。

菊子が十二師団の前に現れたのはその様な情勢の頃であった。

当時の北滿一帯に於ける情報の収集は、困難になっていた。

というのは、日露戦争の頃は東清鉄道の敷設やロシア式のハルピン市街の建設などで我が物顔に振舞うロシア人を追っ払らってくれた日本人ということで中国人の対日感情は良く協力的で情報の収集は容易であった。しかし、戦後数年経てみると、次第に武力を笠に着て高慢になってゆく日本人に対して中国人の対日感情は先のロシア人同様悪くなり、排日、抗日運動さえ起こり始めるという皮肉な結果になっていた。そのため中国人たちの協力は得られ難くなっていたのである。

そうした点では日本人である菊子の様な民間諜報員の存在は貴重であった、その頃菊子は北滿の新宝鎮という街の酒場でマダムとして働いていたのだが、その美貌と長い中国生活の中に培われた俠気で中国人の信頼は厚かった。

近くには海かと思ふ様な黒竜江が悠然と流れ、その北岸のシベリアの大地にはポチカレオ、ブラゴエチェンスク、アルハラといった街が点在している。中でもブラゴエチェンスクはこの地方最大の都市で、中国人、韓国人、に混じって日本人も驚く程多くいた。東清鉄道の開設によって交通の便が良くなったのと船便の良さもあり、商いを求めて北滿から多くの中国人が移住して来ていたのである。

嘗て、北京で西欧や日本の租借という名の中国侵略に反抗して義和団の乱が起きた時その余波はこのブラゴエチェンスクにも及んで来た。ロシア人はこの狂った様な中国人の暴動に恐怖を覚えた。危険を感じたロシア軍はブラゴエチェンスク在住数千人の中国人を黒竜江岸に駆り集めると不安に脅える群衆に向けて銃砲撃の嵐を浴びせた。ために黒竜江の流れは朱に染まり、死体は、流れを堰き止めるばかりの惨たらしさであったといわれている。

それから既に十九年の歳月が流れている。黒竜江は今は何事も知らぬ気に悠久の流れを営んでいる。だが中国人にとってはこの恨みは忘れられるものではない。

この事件を聞いたとき菊子は義憤を感じた。日頃菊子は既に自分が日本人であ

ることを忘れる程に中国人の社会に馴染んでいた。

中国人がロシア人や日本人に非道な扱いをされている場面に出会うと菊子は躊躇うことなく助けて相手を厳しく啗めた。相手が菊子の俠氣と流暢な日本語やロシア語に驚いてきまり悪る気にこそそこそと逃げて行く様子を見て中国人は溜飲を下げた。だから菊子の評判はその美貌とともに高く、酒場はよく流行っていた。

或る日、その新宝鎮の菊子の酒場に一人の見かけぬロシア人が入って来た。別に珍しいことではない。殊に革命後は難を逃れた反革命を唱える富裕層のロシア人がハルピンを中心に数多く移り住んで来た。

富裕層の亡命ロシア人だけではなかった。ボルシェビキ政権になってから東清鉄道の経営権は一応中国に返還されたのだが、施設の維持から鉄道の経営まで経験の無い中国人には一朝にして出来得るものではない。今なお依然としてロシア人が運営している状態である。

その上、日本軍の支援を受けて勢力を得たチタのセミョーフ政権の兵力が一時は東清鉄道の各駅を押さえていたボルシェビキの兵士たちを追い払ったためそのボルシェビキ派の兵士も地下に潜んだ形で或る時は何食わぬ顔で街に出てくることもある。

この様な複雑な事情から、最近では以前にも増してロシア人の姿を見かけることが多くなって来ている。だが、このような様々な階層のロシア人の中でも流石に富裕層のロシア人は身なりといい、マナーといい、他と違って洗練されていた。客馴れしている菊子には直ぐ見分けがついた。

その夜入ってきた見掛けぬロシア人も明らかに最近になって時折入って来るようになったその亡命の富裕層ロシア人の一人のようであった。

だが、これが二人の運命的な出会いであった。

酒場は、いつものように夕暮れとともに賑わいをみせて、酒氣と人いきれでむんむんしている。

「初めての様ね、私菊子と申します。どうぞよろしく」

ロシア語で菊子は愛想よくそのロシア人を迎えた。中国語は中国人並みに流暢だが、ロシア語も会話程度なら何とかこなせた。ロシア人の多い北満では、

殊に接客業に従事する者にとっては曲がりなりにもロシア語が話せなければ満足な応接は出来ない。

そのロシア人は、カウンターの前に腰を下ろすと相手がロシア語が話せると知って自国語でウオッカを注文した。中年前といった好感の持てる男であった。こうしたロシア人は、殆どが自分の身上については話したがらない。夕暮れ時とあって可なりの客だが、殆どが中国人である。中に一、二名ばかりのロシア人もいる。だがこの男は振り向こうともしなかった、

「外は寒そうね」

ウオッカを注いだカップを渡しながら差し障りの無い話題で話しかけた。この男が入ってきた時に吐く白い息で外の寒さが察しられた。

「そのためにこれを飲もうと思ってるやってきました。マダム顔も拝見したくてね」

軽い冗談も忘れなかった。

「お世辞もお上手ですこと」

軽く睨みながら笑みを返してグラスを合わせたのでその男は喜んだ。菊子を目見て好きになった様であった。

「お世辞なんかじゃない、本当だ。実に美しい」

菊子の顔をジーッと見詰めているその目は真剣で偽りでは無さそうであった。服装といい、身に付けている貴重品といい、高価そうなものばかりである。だが今まで入ってきた富裕層のロシア人とはどこか違っていた。今まで接した富裕層ロシア人には見られぬ精悍そうな男らしさが漂っていた。それでいて話の方は洗練されているのである。

端正な顔立ちのその目でジーッと見詰められると菊子も思わず惹かれそうになる程である。精悍さの中に優しさがあった。

「ありがとう。貴君からそういわれるととてもうれしい」

美しいと褒められた時のいつもの決まり文句の返事がつい口をついて出たのだが、今度だけは言葉の響きに真実味があった。

「これからはアレキサンダーと呼んでくれ」

酔えば、そういう外人客はよくあるが、初めからこの様に話し掛けられるの

は今までに経験がなかった。余程菊子が気に入っているらしかった。

「それじゃ、お言葉通りアレキサンダーと呼ばせて頂くわ」

菊子も素直に応じた。それからこのアレキサンダーと自称した男は気さくに地元の新宝鎮の街のことなどを尋ね、珍しげに聞きながら会話を交わしている、給仕の宋が客席から戻ってきて

「瑞様がお呼びです」

と告げた。瑞はこの街では有力者でこの地方の事情には明るい。先程から菊子の方に視線を送っているのに気付いていた。

「アレキサンダー、悪いけど一寸ごめんね」

カウンターを離れ、しなやかなに身を翻して客席に去ってゆく支那服姿は艶やかであった。アレキサンダーはその妖艶な後姿を見送りながら溜め息をついた。

この時、予てから部下に対して素性の知れぬ女に溺れるなど厳しく戒めているにも拘わらず、自称アレキサンダーと名乗ったこの男はその戒めを自ら忘れ、本能の赴くままに余りにも魅力的で女盛りの菊子のまえに既に破滅の道を歩んでいた。

この男こそ今日日本軍が必死になって追い求めているボルシェビキ派の若き闘将モヒンであったのだ。巧みな情報収集によって日本軍の行動を察知し、神出鬼没の行動で多大な損害を日本軍に与えていたのである。

そのモヒンが大胆にも菊子の酒場に現れていたのである。モヒンについての情報は予ねてからハバロフスク特務機関の諜報員本間憲三から聞かされていた。だが、菊子が日本軍の情報員であることをモヒンが知っていたかどうかは別として、菊子は今日の前に現れた男がまさかモヒンだとは思ひもなかった。菊子に気のある瑞の話は、いつも退屈で他愛も無い世間話である。だがお人好しで悪気のない瑞は良いお客である以上機嫌を損ねる訳には行かない。こうしたお客は瑞の他にも多くいる。そうした意味では菊子は、この酒場では女王的存在であった。

瑞の傍らに居る間もずーっとアレキサンダーのことが気になっていた。

「どうした菊子、いやにそわそわしているじゃないか、あのロシア人に気があ

るんじゃないのか」

意地悪気に瑞がからかった。

「そうかも知れないわよ」

素知らぬ顔で軽くいなしてみせたが、内心はどきりとした。瑞と話をかわしながらも脳裏にはアレキサンダーの精悍なうちにも優しさを秘めた目が浮かんで放れないのである。——いい年をしながら今夜はどうかしている——これが偽らぬ菊子の気持ちであった。

一時、相手をした後、瑞の席を立とうとすると

「あのロシア人には気を付けろよ」

といわれたが、その後二、三の馴染みの客に愛想をしながらカウンターに戻る頃にはその様なことは頭から消えていた。アレキサンダーは、空になったグラスを弄びながら所在なげに菊子の戻ってくるのを待っていたが、菊子が再びカウンターに立つとウオッカーを更に注文しながら

「どうだい、キクコ、ハルピンには立派な劇場もある。いい催しがあれば一緒に見に行かないか」

と誘ってきた。好感をもっていただけに嬉しかったが、さすがに初対面では受ける訳にはいかなかった。

「このところ一寸暇は取れそうもなさそうね。ご好意には感謝するわ、有り難うアレキサンダー」

丁重に断る菊子の心情を察してか、自称アレキサンダーも執拗には勧めなかった。

その後、残っていたグラスのウオッカーを飲み干すと明日も新宝鎮にいるから又来るといってカウンターを立った。予定では今日一日だけであった。長居は危険である。だがアレキサンダーは、菊子の魅力の前にボルシェビキ派筋金入りの闘士であることを既に忘れていた。

別れ際にアレキサンダーは酒場の前まで送りに出た菊子を抱いてキスをしようとしたが、手で制した。戸口の陰で給仕の宋が窺っているのに気付いていた。アレキサンダーを送り出して中に入ろうとした時宋が

「マダム、あのアレキサンダーとかいうロシア人、瑞さんもいってましたが気

を付けた方がいいですよ。念のため仲間の一人に尾行させています」
と忠告気味に言葉をかけてきた。

瑞の言葉など、とつくに頭になかったが、宋の言葉で甦って来た。日頃の宋の生真面目な性格から嫉妬でいつているのではないことはよく分かっていた。

「ありがたい、宋。お前にはいつも助けてもらって感謝しているよ」

この若者の機敏さと勘の良さでは幾度助けられたことか、この時初めてアレキサンダーへの疑念がそうあって欲しくないという願いとともに芽生えて来た。

その夜遅く宋が尾行の報告に来了。尾行した仲間の一人がアレキサンダーの宿泊先の棧楼の近くまで来た頃一人の見掛けぬ労働者風のロシア人が現れ、連れ立って棧楼に入って行った。そこで、日頃手なずけているその棧楼の従業員に様子を尋ねたところ、連れのロシア人というのはどうも警護の様な役目をしているように見えるということであった。

「私の勘ではあのロシア人は、モヒンかどうかは別としてボルシェビキ派の幹部の一人に略間違いないと思われるので明日も尾行を続けます」

だから今後も引き続きあのロシア人と接触するためにもこの酒場に来るよう仕向けて欲しい、その中にきつと尻尾をつかんでみせるというのである。

その翌日の夕暮れ時アレキサンダーは約束通り酒場に現れた。昨夜と同じようにカウンターに向かって腰を下ろしてウオッカを注文した。二夜目とあってか打ち寛いだ雰囲気は漂っていた。

「よく来てくれたわね、アレキサンダー」

グラスを渡しなが、せい一杯の笑みを浮かべて歓迎の言葉をいった。が、胸の中は疑念と嬉しさの半ばした複雑な心境であった。

「今夜のキクコの支那服は、とてもよく似合っている」

目が耀いてお世辞だけではないことは一目で分かった。相変わらず精悍な中にも優しさがあった。事実、菊子も――職業柄身だしなみとして二夜続けて同じ身なりはしないことにしているのだが――今夜の服装は特別気に入っているもので自信があった。宋の期待通りアレキサンダーの心を自分に引き付けておかなければならないというだけでなく、心の何処かにアレキサンダーの気持ちに応えたいという思いがあった。心の中は、自由な人間としての菊子と諜報員と

しての菊子の間を微妙に揺れ動いていた。

その夜菊子は、いつもの様に客席の間を愛想よく廻りながらも努めてアレキサンダーの傍らに居る様にした。酔うとアレキサンダーも愉快になって、水の都ペテルブルグに住んでいた若い頃の話などをして菊子を喜ばせた。ペテルブルグは菊子も憧れの都である。目を見張る様な豪華な劇場、上演される演劇、オペラ、バレエの話から夜を徹して行われる華やかな舞踏会など、思わず自分がペテルブルグの華やかな生活に浸っている様な気分になって、このアレキサンダーが果たして宋がいつているようなボルシェビキ派なのだろうかと思わずにいらなかった。帰り際に再びハルピンの劇場へ誘った。

「キクコと一緒にハルピンの劇場だってペテルブルグの劇場も及ばないよ」今のアレキサンダーの頭には菊子しかなかった。

「そうね、考えてもいいわ。でも今日、明日といわれても無理よ。出来ればもう少し暖かくなってからでないかね……」

言い訳してみた考えだが、そういつておけば出来るだけ長くアレキサンダーを自分の傍らに引き留めることが出来るし、宋の思う壺にもなるのだ

「そりゃそうだ、お互いにね。でもよい返事をくれて有り難う」

昨夜は巧にかわされただけにこの思わぬ反応の変化にアレキサンダーは喜んだ。

「この次来る時は、きっと良い知らせをもってくる」

別れ際のキスも許した。北満の星空の下を名残惜しげに去ってゆくアレキサンダーを見送りながら

「これでいい、万事うまくいった。宋、これであなたの思惑通りになったわよ――ほろ苦い思いで菊子は、一人心の中で呟いた。

宋の諜報活動の準備は、既に整っていた。菊子の周辺には日頃から金銭を惜しまぬ面倒見の良さを持ち前の俠気から菊子を中心とした仲間内が何時とはなく出来ていた。中には馬賊の部下もいる。その翌朝宋は、直ちにその中の気の利いた若者一人と共にアレキサンダーを尾行した。

アレキサンダーの乗った馬車は、暫くする中にハルピンの方向でなく黒竜江の岸辺の街、愛暉に向かっていることがはっきりしてきた。愛暉といえば黒竜

江を挟んでブラゴエチンスクの街が望見出来るところである。これで目的地はハルピンでなく、ブラゴエチンスクであることが明確になった。ブラゴエチンスクといえばその周辺はボルシェビキ派バルチザンの活動が盛んな地域である。ハルピン住まいの様に装っていたアレキサンダーと自称する男は、亡命中の富裕ロシア人はおろか、ボルシェビキ派の幹部、いや、若しや予感通りモヒンかも知れない。宋らは、更に黒竜江を渡って尾行を続けた。

ブラゴエチンスクの街にはいったのは二日後の陽もとっぷり暮れた頃で暫く尾行を続ける中に街のアレキセーフスク小学校付近に来た頃二人の姿を見失ってしまった。辺りは灯かりもなく漸く星空のもとでの搜索であったが、小学校付近から離れた形跡は、見られず、宋はこの付近に何らかの拠点があると考え、滞在して見張りを続けることにした。

ブラゴエチンスクといえば中国人の街と聞いていいほど中国人の多い街である。菊子と繋がりのある者の中から信頼のおける者数人を選んで内偵を進めた結果、アレキサンダーと名乗った男は、モヒンに間違いなく、以外にもアレキセーフスク小学校の地下室がその拠点になっていることを突き止めた。

拠点は、転々と移ってゆくため宋は、直ちに新宝鎮に引き返して、このことを菊子に報告した。

「……」

菊子は絶句した。精悍な中にも優しさを漂わせたアレキサンダーの顔が浮かんだ。誇らしげに語る宋がこの時ばかりは憎いと思った。モヒンは、自ら部下に諭しておきながら菊子の魅力に溺れ、新宝鎮の滞在を一夜延ばしたばかりにその拠点を突き止められ、破滅の道へ転落する結果となってしまったのである。

菊子には、軍部の策動によって今日日本が推し進めているシベリア、満州を含めた日本海内海構想の実現に日本人諜報員として協力しなければならぬという使命があった。―アレキサンダー許して……これが菊子の悲痛な心の叫びであった。だが現実には

「宋、よくやってくれた。ありがとう、直ぐ本間さんに連絡する」

といわざるを得なかった。

連絡を受けた本間は、飛び上がらんばかりに喜んだ。

「有り難い、菊子、大手柄だ。これは褒章ものだ。今にきつと良い知らせが届くだろう、楽しみに待っていてくれ」

この情報を受けた軍部は、直ちに軍政を布いているチタ政権のセミョーノフに奇襲して逮捕するよう命じた。命令を受けたセミョーノフの軍隊はアレキセーフスク小学校の地下室を包囲してモヒンを捕らえ、日本軍に引き渡した。日本軍は、即日処刑した。

しかし、その後、良い知らせを届けようといった本間憲三は、菊子の前に姿を現さなくなった。来るに來られなかったのである。菊子も褒章を当てに密告したわけではない。むしろアレキサンダーこと、モヒンには好意以上のものを抱いていた。しかし、日本人としての誇りと情報活動に情は禁物という規律のもとに密告を決断したのである。菊子も一人の女である。アレキサンダーの求めを容れて東洋のモスコワと言われるハルピンの華やかな劇場で腕を組みながら楽しい観劇の一夜を過ごしたかったという思いがなかったといえば嘘であった。アレキサンダーことモヒンの拠点を突き止めた宋に良くやったと褒めながら心の片隅でむしろ宋を憎んだ。

本間憲三が菊子の前に現れぬままモヒンの処刑を耳にしたが、その後も依然として消息はなかった。本間は菊子に会す顔がなかったのである。

事件の後本間は菊子の褒章の件を上申したが、軍部は菊子が娼婦であるという理由で却下したのである。このことを噂で知った菊子は絶望の中に日本人であるという自覚を捨てた。それだけではなかった。この事件の真相をボルシェビキ派が知れば、菊子の身が危険である。そこで菊子は、予ねて知り合いの中国人孫花亭がブラゴエチンスクで経営しているオーロン宮という酒場で名前も「お春」と変え、マダムとして勤めることにした。オーロン宮とは看板だけで、その実、孫花亭は、張作霖の義弟と称する馬賊の頭目であった。ここなら安心して働けた。

ところが、或る日このオーロン宮に堀井中尉と名乗る特務機関の将校が数名の部下とともに乗り込んで酒場の調査を始めた。孫花亭の素性を怪しんのでのことであった。案の定、隠し地下室が見つかり、そこから金貨、金塊、砂金といった財宝が大量に発見された。勿論馬賊として掠奪したものもあるが、酒場で稼

いだものもある。ブラゴエチェンスクの北方を流れるゼーヤ川の流域は砂金が豊富で出稼ぎの鉱夫たちが夜になると街の酒場に集まって湯水の様に金を落としてゆくのである。それにしても酒場稼業などでは到底得られる様な量ではない。中にはロマノフ王朝の金貨もある。ロマノフ王朝の金貨といえば、いま日本軍が大蔵大臣高橋は清の指令でその行方を追っているところである。孫は、あくまでも稼いだ金だといひ張って激しい争いになった。孫も一歩も引かなかった。それを尊大な態度と見た若い堀井中尉は

「斬ってやる」

と軍刀に手を掛けた。それを傍らでじーっと見ていた菊子が間に割って入った。

「斬るなら斬ってごらん。もし斬ったらあんたの首も飛ぶわよ」

伝法肌な語調だが、流暢な日本語である。驚いた部下が堀井中尉を制止に回った。部下の中に菊子が嘗てモヒン逮捕の功績で軍部に顔がきくことを知っている者がいたからである。さすがに堀井中尉も軍刀から手を離さざるを得なかった。

菊子のお蔭で難を逃れた孫花亭は、この事件後菊子に恩義を感じると共にその度胸の良さと面倒見の良さを見込んで酒場よりも自分が留守の時などには馬賊稼業を任せるようになった。これが「女馬賊菊子」として北満に勇名を馳せる新たな人生の始まりであった。

部下たちは、菊子の性格と経歴を知って、よく服従した。日本の軍隊の内情に詳しい菊子は烏合の衆的な形態の馬賊の集団の中に日本軍の組織の良いところを、取り入れ、一方で金銭を惜しまず、火器から服装まで整え、規律を厳格にした。馬賊といえば無差別に掠奪をおこなう悪行の集団の様に聞こえるが、中にはそうした集団があったかもしれないが、多くの馬賊の仕事の実態は、大半が中国の土地を占領し、我が物顔に振舞う日本軍への反抗であったのである。菊子の集団は悪徳地主や役人を襲うことはあっても無差別な掠奪は行わなかった。そのため菊子を慕って服従する馬賊は次第に多くなり、その勢力は一時は一万に達したといわれている。無警察状態の北満では物資の輸送等には却って

馬賊の庇護が必要であった。そのため勢力のある菊子の発行する通行手形は高価に取引されたと言われている。

だが、菊子の悲運は、徐々に迫っていた

日米英仏の連合軍がシベリア出兵に踏み切ったのが一九一八年（大正七年）四月、以後華々しい戦果もないまま、支援すべき筈であった西部の都市オムスクのコルチャック政権が勢いを得てきたボルシェビキ派の赤軍の攻勢の前に崩壊し、コルチャックは、オムスクを捨ててイルクーツクに逃れたところを捕らえられて処刑された。

ここに来て、シベリア出兵の意義を失った米英仏の三国は撤兵を決議するが、日本海内海構想を夢見る日本だけは却って増兵に踏み切って、国際世論の非難を浴びながらチタのセミョーノフ政権を立てて、先ずシベリア自治政府を樹立し、飽くまでも日本海内海構想を実現しようと目論んだ。しかし、その頼みのセミョーノフ政権も次第に勢いを増すボルシェビキ派の赤軍に追い詰められ、遂にチタを放棄して旅順に亡命することとなる。こと此処に至って漸く日本軍もシベリアから撤兵せざるを得なくなった。米英仏の三国に遅れること二年後である。

これを知って菊子は、落胆した。モヒン事件以来日本人を捨てたといっても血は捨てられるものではない。現実にシベリアから日本兵の姿が消えると日本海内海構想を夢見ていただけに落胆は寂しさに変わった。加えて北満の情勢は、菊子らには厳しさを増してきた。

シベリアを放棄した日本は、改めて満州国の独立を画策し始めた。しかし、これには大きな障害があった。それは先に東三省（奉天、吉林、黒竜江）を制して独立を宣言した張作霖軍閥の存在であった。この相容れぬ二大勢力の間にあって菊子らの率いる馬賊の集団の存在は、次第に弱体化して行く運命にあった。

孫も去り一人になった菊子は、総ての夢を捨ててシベリアは最果ての地ニコラエフスクに向かった。ここは一九二〇年九月、ボルシェビキ派バルチザンの手によって天草人も含む多数の日本人が虐殺されたばかりのところである。どうして菊子が同胞の悲劇の地ニコラエフスクに向ったかは謎である。

八歳の時、故郷天草をあとにして大陸に渡り、すでに三十年の歳月が流れていた。ニコラエフスクに向けて何処まで続くとも知れぬ遙かなシベリアの雪原を列車の窓辺によって眺めながら一人旅する菊子の胸中をどの様な思いが去来したことであろうか。

この頃既に馬賊時代の過酷な生活が菊子の体を蝕み始めていた。ニコラエフスクに着いて間もなく病の床に伏すと、シベリアは春まだ浅い四月波乱に満ちた三十九歳の生涯を閉じた。どの様な処で、どの様な病でといったことは勿論、最後を看取ったという人の話も聞かない。

◎後記 この物語を書くに当たって資料収集に大変ご協力をして頂いた宍粟市立図書館の小西司書以下職員の方々に誌上をかりて心より厚く御礼申しあげます。有り難うございました。



第二十八回春の芸能祭ご案内

日時 平成十九年五月二十日（日）

午前十時から

場所 宍粟市山崎文化会館（サンホールやまさき）

主催 宍粟市山崎文化協会・（財）山崎文化振興財団

後援 神戸新聞社・宍粟市教育委員会

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご覧くださいますよう、
ご案内申し上げます。

参加部門 山崎詩舞道連盟 山崎邦楽邦舞研究会

さつき民謡グループ 播州山崎太鼓

山崎民謡連合会 宍粟市やまさき老人大学

その他宍粟市内より賛助出演

“誠”なる理科学教育に向けて

大阪府立大学助教授 田中良晴
(山崎町三津出身)

はじめに

当機関誌に原稿を依頼され色々と思いつくことがありましたが、大学、大学院と進み、現在、大学の一教員として勤めております関係上、現在の教育、特に理科学教育全般が抱える問題と、私の考える何らかの改善案（と言えるかどうか自信ありませんが）を少しでも多くの方に伝えたく、筆を取らせて頂きます。

問題点

よく、科学者、科学技術といわれていますので、“科学”という言葉はなじみ深いですが、“理学”は理学部ぐらいしか思いつきません。両者は似ているようで違いますが定義に関しては多くの方がすでに述べておられるのでここではあえて言いません。実際には理学部でやっていることも、小中高での理科教育も理学と科学を一緒にしたようなものですから、本稿ではそれらをまとめて“理科学”とか“理科学教育”と表現します。

年々若い人の理科学離れが加速しています。小学校から高校まで理科を勉強してきたとしても受験のためがほとんどであり、真の理科学の面白さを感じている人はどのぐらいいるでしょうか。自分は大学で教育・研究を十五年ほどやっておりますが、年々学生の基礎学力低下を専門の生物学での教育を通じても感じられますし、また他の分野の先生方、他大学や高校の先生方と話しても同じようなことを言われます。このままでは、科学技術立国日本の将来が先細りになります。どんなに素晴らしい芸術、文化も科学技術がしっかりしていて、良い物を作り、良い環境を守り、日本人が環境と共生できてこそ成り立つのです。基礎学力低下は、それまでの小中高教育において、少子化による競争環境の

変化、土曜休による授業時間の減少、ゆとり教育の導入、公的教育費の削減などが原因といわれます。無論それらは大きな要因には違いありませんが、改善をすぐに行うことは難しいでしょう。

改善策は？

短期的に出来る改善策は、まず若い人に学習意欲を持たせることではないでしょうか。最もこのことは多くの方が言っていますし実践もなされています。理科学教育においても、子供向け科学塾、実験塾が多く出来ており、最近では大学や研究機関でも公開講座などを開いており、一般人とくに小中高生に対し、理科学に興味を持たせることに熱心です。私もこの夏「ミクロバイオへの道」という、ショウジョウバエやタマネギの染色体観察を一般向けに開講しましたが、特に高校生に好評でした。大変よい傾向なのですが、これらはどうしても費用もかかるし（たとえ無料の講座でも交通費がかかる）、それ以上に時間の制約があります。また効果が現れるのに十年ほどはかかるでしょう。同時にもっと手っ取り早く、また気軽にお金も時間の制約も少ない方策も必要でしょう。

そこで考えつくのは、一般の方が子供や孫にできる以下のようなことです。要するに年少時から理科学環境作りです。

1. 科学館、博物館に連れて行く。特に東京・上野の国立博物館は量、質とも文句なしにお勧めですが、そこまで遠くに行かなくても例えば大阪市立科学館など山崎の近くにも優れた科学館、博物館が多くあります。学校からも校外学習でよく連れて行ってはくれますが、自分自身も勉強し直すつもりで積極的に出かけられてはどうでしょうか。子供さんと普段と違った対話が出来、また思っても寄らぬ能力を見つけることもできるかもしれません。

2. 大型書店、科学館、クラフトショップなどで実に様々な実験キット、工作キットが売られています。私が子供の頃に比べれば、一つ一ついろんな店で取り揃えなくてもよいのでだいぶ便利になりました。またインターネットでこんなのがあったらいいのになあ、と思ったなら検索でき、そして見つければ通信販売で手に入れることも可能です。安全に注意して、一緒に実験したり物を作ったりすることは、机上の理論ばかりでなく、手を動かし試行錯誤しながらの生

きた体験学習となるでしょう。説明書通りに行ってもうまくいかない場合も説明書自体が分かりにくい場合もあります。しかし、困難を乗り越えうまくいったときの喜びはひとしおです。学校理科の学習意欲向上にも大いに役立つと思います。

3. 近くでいいので、山、川、海などへ図鑑、カメラなどを持っていき、動植物、岩石などの名前を調べる。単に散歩、ハイキングするのと違い、違った目で自然を見ることができるよう。また、海岸の波は何故周期的にやってくるのか、何故円盤状の石を回転させながら、水面に投げるとびょんびょん跳ねるのか、など身近で素朴な疑問も色々な本やネットで調べるのもよいでしょう。まさに身のまわりのもの全てが“師”です。

4. 以上の記録を紙で行うと他の色々な本や資料とごっちゃになり、貴重な記録が散逸しがちです。日記風でよいので、観察、実験、工作記録をワープロなどで電子ファイル化するのを勧めます。また反省材料にもなり、感動の再現にもなります。

とは言っても、何十年も理科学から遠ざかっていた大人には、子供をそちらの方に導くのは大変でしょう。子供の方が良く知っていたりすることもあるでしょう。願わくば、大人も子供をも指導できるような、一般人よりは少しばかり理科学の経験の深い人が身近にいれば結構なのですが。私自身が、諸条件さえ揃えば、そのような教えたい人、教わりたい人が集まるような施設を作りたいと考えています。

理科学教育の未来

日本の理科学教育・研究の現状は年々厳しく嘆かわしいものになってきています。日本全体の科学技術予算の減少、配分のアンバランス、極度の専門化、細分化（いわばバベルの塔）、他分野への無関心、無理解……。府立大学もそうですが、最近大学や研究機関が法人化、統廃合がなされ、一面改善されたところもありますが、新たな問題を引き起こしていることも事実です。はっきり言って、目度い話など殆どなく暗雲が漂っている状態です。このような時代にこそ、子供達に理科学は面白く、楽しく、エキサイティングで、役立つものだと

教え、夢を持たせたいと思います。無論すべての子供が科学者になるのではなく、文系に進むにしろ、理科学的素養（教養）はこれから益々必要になってくるのは広く言われていることです。逆に理系に進む人間にも文系的素養が必要です。いずれにせよ、これから益々深刻化するエネルギー問題、環境問題、健康問題、経済問題などに、国内外の多くの人と手を取り合い真正面に前向きに解決できる意欲のある人を育てていきたいものです。

最後に、この原稿を書く機会を与えていただきました、前野良造氏および古河道子氏に感謝の意を表します。

参考資料

理科ハンドブックI これからの理科授業実践への提案 日本理科教育学会編
東洋館出版社



著者のプロフィール

1960年生まれ。神野小学校、神河中学校、山崎高等学校を経て、1982年 東京大学理学部生物化学科卒。1987年 東京大学大学院理学系研究科生物化学専門課程博士課程修了。理学博士取得。理化学研究所ジーンバンク室流動研究員、米国シティオブホープ研究所分子遺伝学部門研究員、大阪府立大学総合科学部助手、大阪府立大学総合教育研究機構講師を経て、現在大阪府立大学総合教育研究機構助教授。研究の専門は、ショウジョウバエの神経科学、分子生物学、携帯電話の影響評価、など。担当授業は、生物学関連の基礎と教養科目。

短歌

歌集『風となる鳥』岡本光代

鑑賞

山崎歌人協会 稲村幸子

歌集『風となる鳥』は、当地出身の歌人岡本光代さんの上梓された第一歌集であり二〇〇六年二月十日発行となっている。

・母の着しきものの衿を思はせて峰が重なるふるさとの山

地方色の濃い母恋の歌が巻頭に収められ、全巻約三三〇首中約百首が母恋の歌によって占められている。

・わらべ唄を小さき声にうたひつつ

母は小豆の種を選びゐる

・亡き父の好みて着たるセーターを母は小さき膝に解きをり

・父の墓に参りてきたる母ならむひと握りのわらび摘みて戻りぬ

・この村の五番目の長老になりたりと夜更けにぼつりと母は呟く

・ひとしきり咳き込みるしが窓越しにおぼろの月を見てをり母は優しく温かく然も綿密な目差が母の一挙手一投足に注がれている。

そんな平穏な日常の生活から渾渾と湧き出る美しい抒情詩である。

・明朝は再入院をする母が山椒を白に挽きてゐるなり

・手術終へし明治生まれの母は言ふ「少しぐらゐは痛くてあたり前」

・やうやくに一椀の粥食みくれし病みゐる母の白髪を撫づ

・おかっぱの頭を撫でてくれし手よ病み細りしを朝あさに拭く

・病む母を安堵させやる嘘なればつき通さむと心に誓ふ

・いま一度歩む日の来よ病む母の杖は玄関に立てかけておく

・日に一度起こして抱く母の背は万の言葉のごとき温もり

人の世は常ならぬものである。

日頃まめまめしく気丈であった母が再度の入院をされるようになった。

手術の後病状が次第に悪化し衰弱してゆかれる様相を経糸とし、それを憂うる作者の真実心を横糸として紡がれる歌の数々は哀切にして美しい。正統な写真・丹念な表現によるものであろう。

・みっちゃんと微かにわが名呼びくれぬ母の言ひたる最後の言葉

・われが手を引かねばどこへも行けざりし母が発ちたり彼岸を指して

・朝より屋根を離れず啼く鳩は母がよこしし使者かも知れず

・亡き母が手車押して戻らずや陽炎ゆるる春の野の道

・癒ゆる日を疑はず母の求め置きし春野菜のたね夕光に蒔く

・もしや燕となりて戻らむ母のため少し開けおく表の引戸

・病名告知すべきとふ声亡き母に隠し通しし自負をゆるがす

・亡き母の歩む音かと耳研げば落ち葉降るらしたかきこそと

・いかばかり喧噪の中にあらうとも聞き分けむわれを母が呼ぶなら

・ほとほとと背戸を叩く夕風よ戻るはずなき母をまた思ふ

是より挽歌となる。

「十三年の回忌を迎えますこの年歌集を編む決心をいたしました」と「あとがき」にある。「当時のあれほどの悲しみも、年月とともにうすらいでまいりました」ともある。真正直、純真なお方なのだと思います私は此処で涙を拭いた。

各地短歌祭入賞入選作品

◇第十八回 神戸短歌祭

(四月二十九日・県民会館)

・兵庫県知事賞

視力なきその目を上げて君は今朝空が高くなったねと言ふ

岡本 光代

◇第二回 宍粟市民短歌祭

(九月十日・宍粟防災センター)

・兵庫県知事賞

戦争を知らぬ十九のバスガイドひめゆりの由来ひたむきに説く

下村 捷子

・兵庫県議会議長賞

ちち看取る姑のかたへに覚えたる介護の術が今を支ふる

伊東まさ子

・神戸新聞社賞

生きてゐるほんのひとこま丹念に古新聞を束ねをりたり

田淵 和子

・宍粟市長賞

吾が愚痴を「聞いているよ」と言うごとく老犬尾を振る上目づかいに

谷本 幸子

。宍粟市議会議長賞

折々に器に伸ばしし指触れて夫と
無口に葡萄を食める

垣内 松代

。宍粟市教育委員会教育長賞

かがまりて幼と合はすセッセセ
小さな手よりぬくもりもらふ

森 つな

。宍粟市文化協会会長賞

うたた寝のうつろなわれに扇風機
の風向けくるる嫁の気配す

坂口 廣子

。宍粟歌人連盟賞（山崎町のみ）

子の呉れし時計が腕にたゆみなく
暑き田中の除草励ます

日下ふさゑ

外国より来たりし吾子の新妻の海
の彼方の母おもうかも

赤松 恵子

賑やかに食事してゐる夢見たり醒
めて暫く余韻樂しむ

北 隆治

円き実の三つ五つと寄り添ひて家
族のやうな葉陰のくるみ

大井 千明

◇西播磨短歌祭（平成十八年度）

（十月二十五日・西播磨文化会館）

。兵庫県知事賞

少子化は村の行事におよびきて子
供相撲に女の子も混ざる

岡本 光代

。奨励賞

地に低きところにわれを呼び戻す
ひっそり生れたる今年の茗荷

森本萬千子

。佳作

朝市の風鈴売りが川風を団扇にの
せて風鈴扇ぐ

安政 嘉子

類伝ふ除草の汗はかわき来て稲田
の水に夕焼け映る

日下ふさゑ

◇第十八回 ふれあいの祭典短歌祭

（十月二十八日・養父市関宮町）

。養父市教育委員会賞

「お早う」と言う子言わぬ子それ
ぞれの傘にひとしく梅雨の雨降る

山本 正子

一葉会詠草（新仮名）

白百合はふりしぼるごと香にたち
て厨の床に終の花落つ

伊野 和子

手になじむ端切れお手玉三つ選り
子らの目集めて「いいむうななや」

植木 洋子

古都はしる人力車ひく若者のたく
ましき肩を春風が追う

北川 政子

古里の辛夷見たしと言いいしが友
は真冬の京に逝きたり

小林ハマ子

春遅きふるさと山崎の芹みつば土
つきしまま今日届きたり

谷 瑞木

水底の砂をみだして逃ぐる雑魚追
う翁あり童にかえりて

戸田 葉月

田の畦を選りてゆく日はすこし鬱
犬に愚痴るを鴉見ている

森下 逮子

公孫樹の実あまた落ちいる簞箒神
社またも来てみむ空高き日に

森元ゆきこ

境内のつばき木下を尾長鶏自由ふ
みしむ少し気取りて

山口 ひさ

はるかより野を渡りくる風ありて
萬のコスモス萬の首振る

山崎 智絵

山椒をゆでて袋に詰め分ける義妹
に一つ吾子にもひとつ

横野 光子



俳

句

山崎俳人協会

青嶺句会 三 浦 ゆ き

花の岡山後楽園へ吟行

四月七日、青嶺句会会員揃って春爛漫の岡山後楽園へ吟行に出かけました。

暖かな陽気で山崎では二・三分咲きのほころび始めたばかりでしたが、着いた後楽園は西方浄土そのもの。曲水の流れが豊かに広いなだらかな庭園を巡り、花々は咲き乱れ、たくさんの人々がゆったりと散策を楽しみ、まさに桃源郷に遊んでいるようでした。

- ・飛行船後楽園は花浄土 八重
- ・四月の良き日善き友佳きさくら 茂太
- ・吉備路行く花の吟行なごやかに とみ代
- ・咲き満つる花の上なる天主閣 美保子
- ・車椅子道ゆづりあふ花の下 ゆき
- ・天主閣悠然として花の中 良子

それから倉敷の古い街並を巡り、いたる所で満開の桜を堪能した心に残る吟行の一日でした。

- ・正座して婆三人の花筵 光栄
- ・園日永水苔つく錦鯉 千代
- ・芽柳や栄華の名残倉屋敷 光子
- ・糸柳影をおとしてなまこ壁 栄子
- ・帰路、その心の高まりは続き、疲れもなく山崎インターの桜も朝の二・三分咲きが、満開になって迎えてくれました。

さわらび句会詠草

- ・園児らの声きらきらと花の下 小林 紫生
- ・苗そろふ植田の水面風の波 山中 正子

日が風が木々の芽吹きをうながせり 川崎 栄子

母の日や母の遺せし香を薫く 庄 昌子

一ひらぶつ秘密とくごと薔薇ひらく 壺阪加代子

日燦々秋のカンナを遠くより 本條 淑子

紺青の空を背にして松手入 山岸その子

雨雲を超え天空に去ぬ燕 藤井 七代

栗一つ又一つ剥く間の無心 薄木満寿恵

朱倫句会詠草

園児らの手話の合唱冬重 藍 千恵

秋を焼くこの世に格差と云う習い 阿曾 久子

鈴なりの柿に照らされ鄙の家 井口 洋子

小面のゆるむ一刻夏の果て 木村今日子

レモンティ朝顔日記のボールペン 小嶋 弥生

パレードのひまわり二・三横見する 千種 洋子

水澄むや峽に真顔の戻りけり 戸田 明子

シルクロード想いつつあむ毛糸玉 福井 清翠

月見草言葉持たない国のあり 藤井 里子

船頭に恋してしまいいし赤とんぼ 松本 寿子

雪解けて笑顔でおわす野の仏 三浦 ゆき

トネリコの椅子と戯れ夏の月 空木 章

秋の蚊を叩きそこねし憂いかな 片山 一樹

芒原日本国のあり処 小林 優

我が性は芥子の花かも蚯蚓かも 嶋村 浩二

重力レンズわが分身の夏かげろう 岡田 芳一

天上をあけっ放して原爆忌 福井 泰好

力学を崩す大宇宙蜻蛉飛ぶ 前田 茂

菜の花を叱るものなし風のまま 宮田 久作

表札は亡き人のまま石路盛る 宗平 圭司

青嶺句会詠草

鳥城後楽園は花明り

芦田 八重

雪解風彩取り戻す花時計

秋久 光子

梅雨深し新刊書にもある湿り

石野 光栄

山門の訓示のやさし萩の寺

大谷 延子

酒倉の続く古町蜩飛ぶ

下村 君子

雪解の水音騒ぐ草の下

茂田 茂太

輪になって仏具磨きや盆の寺

杉山美保子

母よりも背丈越す子や卒業す

田中 良子

坪庭の萩気まぐれに枝垂れけり

鳥羽チエノ

陽を弾き木をはじきて猫柳

永井とみ代

月澄みて一朵の雪のさやけしや

秦 千里

級友に抱かれし遺影卒業式

藤家 千代

結び上げし髪の匂へり初詣

山口 栄子

吹く風の心に添ひし月の道

三浦 ゆき

刻なしに鐘を撞せて花の寺

福田 泊水

山脈句会詠草

冬晴れや魚体に意志のある如く

浅田 蕪耕

落城哀話音頭に秘めし盆踊り

池田 陶瓦

秋冷の光まとひて湖中句碑

宇野 幸子

青田道手は羽になる一輪車

大西 敦子

姉弟籠見せあひつ土筆摘む

栗山きよみ

朝霧を纏える山の美神かな

新馬 立風

朝取りの藍のしたたる初なすび

竹添寿美子

退院の母を待つ家青田風

田中 恵

一輪の花にも風情秋深し

畑林 和枝

指先に小さな命大根時

福田 一栄

薬草の宝庫伊吹の霧ふかし

前野 房子

身近な歴史

遺物の発掘

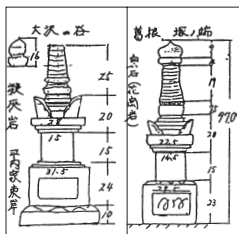
山崎郷土研究会

森本 一二

平成十七年六月、土万地区葛根の横野正浩さんに案内してもらって、地区内の宝篋印塔を見て回りました。

私は宝篋印塔には関心を持ち、つとに郡内外を巡遊していたのであるが、山崎町内には、小茅野・塩山の二塔が比較的に良く保存されているのみで、完全に揃った塔は皆無であると思っていたので、よく整った六塔を見て驚きました。

次いで七月、見残しの、葛根「塚の端」の塔を教えられ、更にまだ残っていたと、大沢「谷」の完全に揃った塔に案内してもらいました。



どうしてこのように、すばらしい塔が八基もあるのに、誰も塩山の塔以外は語らなかったのか、不思議で

ならないと共に、今回のご縁を有難く思っています。

宍粟市北部にはこの塔がよく遺されており、一宮町、波賀町で四塔、千種町で一塔が市の文化財に指定されていますが、土万地区の二・三塔は決して遜色のない塔でありますので、平成十八年度、文化財審議委員会の新指定候補物件に取り上げられました。

ではこの塔は、珍しい塔なのでしょう、そうではありません。

私たちの河東地区には、矢原、神谷、三谷、須賀沢でその笠の部分が遺っていますし、川西の三津には、塚の上に欠損塔が立っています。

皆さん方の近所にも、人知れず、この塔が建てられているのではないのでしょうか。

またこの塔に限らず、人知れず遺されている、石塔や建造物、古文書や伝承がいろいろあるのではないのでしょうか。

私達郷土研究会では、度々「事務局だより」などを通して、身近な歴史・遺物の発掘を呼びかけています。

このような願いをこめて、土万地区宝篋印塔の世に出た話をさせてもらいました。

シーボルトの木

山崎植物同好会 井口武一

今年最後の観覧会は神戸の森林植物園でした。例年だと紅葉の真っ最中のはずが遅れ、もう一週間後だともっと見事だったろうと悔やまれました。福田さん（山崎町出身で当園の職員）のユーモアある説明で園内をまわり充実した観覧会ができた一日でした。

その中で特に印象に残ったのはハナノキやイロハモミジの紅葉の中に珍しい樹木シーボルトの木を初めて見たことです。幕末に日本を訪れたオランダ医師シーボルトが出島の自宅の庭に植えていた落葉樹でのちに牧野富太郎が植物雑誌に発表しました。そして、一九一二年、御江久夫が中国で同じものを見つけた曰くある木なのです。つまり中国原産です。

もう花は無く直径八ミリほどの黒い実をいっばいつけていました。命名者ゆかりの牧野植物園にもあるそうですが、こうした珍しい花や樹を見ると誰でもちょっと由来を調べてみる

たくなるものです。

別に植物園に行かなくてもこうした珍木は街角を通る時ふと出くわすことがあります。誰がいつ、どういういきさつで植えたのだろうか、思いを馳せながら歩くのは楽しいものです。そして時期をみて再び訪れると、花を咲かせ、いい匂いを漂よわせていたりして嬉しくなります。でも、確かこの辺りにあったはずと探して見ると道路の拡張や部屋の増築などで無残に切り倒されたり無くなっていたりしてとてもがっかりすることがあります。誰が切ったのだろう。移植の手もあっただろうにと残念に思います。育つのに相当の年月を要したのに、と植えた人の気持ちを思い悲しくなります。

後の者はどうあれ大切に見守り引き継ぐ義務があるはず。特に古木や学校の卒業記念樹などは目に見えない赤い糸が四方八方に繋がっていることを忘れてはなりません。

新潮会

五十五年の歩み

新潮会

伊藤 勉

昭和二十七年戦後の荒廃した社会の中で、明治、大正生まれの時代感覚を同じくする者が自己の研鑽と地域社会の文化の向上に情熱をそそぎ、併せて会員相互の絆を強め品性を高めようと結成してから本年で五十五年の歳月がたちました。

当初二十二名の少人数でしたが壮年期のエネルギーで積極的に文化活動に取り組み、社会評論家の嘉治隆一先生始め、大宅壮一先生等三十数名の文化人を毎年の様にお招きして町民一般の方に講演をしていただきました。元陸軍参謀、辻正信氏の講演を旭座で開いた時は、満員で二階の床が抜けるのではと心配したほどでした。当時はまだテレビもなく講演会等が大変珍しく、どの講演会も盛況でした。又郷土出身の生沢朗画伯、松井叔生画伯の個展等も開き、会員のみならず、町民一般の方々に

も喜んでいただきました。

結成当時の方も多くが他界され今では五人だけとなりましたが、途中で志を同じくする方々の入会があり現在は三十一名で運営しております。新年宴会、花見例会、紅葉例会、忘年会、会員旅行等毎年欠かさず親睦を図るかたわら、地元の知識人をお招きして有意義なお話を聞き勉強しております。

昔は山崎町のどの会合でも時間は山崎時間といって開会時間に遅れるのが普通でしたが、新潮会では必ず五分前には出席者全員が揃って定時に例会を始めます。

又、十年、二十年、三十年、四十年、五十年と節目に式典を行い、公共の場所に記念事業を行い五十周年の平成十四年には、中広瀬の夢公園に会員でもある長田産業さん、西兵庫信用金庫さんにも御協力いただき『夢の響』の鐘を設置しました。今後はさらに研鑽につとめ会の益々の発展を期しております。



「宍粟の碁」 を尋ねて

山崎囲碁同好会

竹添和彦

一九八四年高野圭介氏が発行された『宍粟の碁』から宍粟の過去の愛好者を尋ねて見ました。それによると、山崎町西鹿沢には闇斎派朱子学の開祖と言われる山崎闇斎先生（一六一六～一六八二）の旧宅があったと伝えられる。先生は碁の愛好者であったと推測される。宍粟囲碁の祖、三木作十郎氏（一八三五～一八九八）の墓は碁盤と碁笥から成っており十二波の西河岸に氏の生前に建立されている。一八九五年に碑文を福原謙七翁が記している。謙七翁は最上山への登り道、左手に頌徳碑が建立されている。山崎出身の偉大な碩学・崎門学派であった。翁も何にもまして囲碁を好まれた。三木作十郎氏に学んだ三木元三郎氏の墓は生前に建立された先生に次いで碁盤の墓である。三木元三郎氏の口ぐせは「碁は自分の性格をよく表すものだ。だから慎重に打つように。君達の碁は、

後始末をしないからいけない」と言われたとある。佐渡屋六代当主前野次郎吉氏（号を琴石）は一生涯を囲碁に起き囲碁に伏した。又、自分の子前野四郎氏九才で初めて囲碁を教えている。円山豊氏（一八八一～一九五四）一級（現在五段）に囲碁を教えて貰おうと、門を叩く人も多数あった。その中の優等生のひとりが前野四郎氏である。一九七四年、円山豊氏追善碁会の開会に当たり主催者前野四郎氏の挨拶は「円山先生は碁の指導も上手で、定石を詳しく説明されたものです。」又「ノゾキには無条件にツグべし」と口が酔っばくなるまで教えられました。安井金三郎氏は「私ほど碁の好きな人は他にあるまい」又、人々に伝えるに「人生は要するに一局の碁なり。先が見える者が勝つ。されど、勇気なくば勝つべき碁にも負くるべし」大町桂月を座右の銘とされたとあり自分の分身として碁を愛した一生であったと『宍粟の碁』に記されています。思いのままに抜粋したことお許し下さい。先達の方々の囲碁に対する真剣な思いを学び精進したいと思います。

山崎茶華道協会の活動と私

山崎茶華道協会

北川泰子

山崎茶華道協会の名ばかりの会員であったのが役員になって三年が過ぎ、協会の活動がどのようなものであるか、少し分かって参りました。この一年間の活動を拾ってみますと、四月の総会から始まって、六月の「さつき祭り」協賛茶席、八月の研修旅行、九月のチャリティー月見の茶会、十一月の「秋のふれあい文化祭」協賛華道展・茶席などで、この他に、本年は、役員のうち茶道裏千家流の者が担当して夏から十五回シリーズで続いている「子ども茶道教室」があります。

茶席しつぽを設えるためには、倉庫から茶道具一式運び出し、紅白の幔幕を張ったり、ボードを立てたり、長机を運んだり、男のひと顔負けの力仕事しごとが、それも、前日と茶会が終わった後の二回必要なのですが、先輩諸姉は何の苦情も言わずに一致協力して要領よくされ、はじめの頃の私は、本当に驚きました。

「子ども茶道教室」も、朝八時に集合し、掃除しお花を活け、お湯を沸かし、お道具を用意し九時半に来る子どもたちに、袱紗と懷紙を懐中できるよう工夫されたヴェストを着せ……となかなか手がかかりますが、みなさんににこにこやってもらえます。

このように活発な活動が、今のようにはボランティア、ボランティアと言われているなかった四十年近くも前から続いていることに、心から敬服しています。これも茶華道の教えの中に、しっかりと奉仕の精神・協調の精神が位置づけられているからに違いありません。

私も、遅まきながら茶華道の教えを胸に刻み、自身を磨きつつ、地域文化の向上に少しでも役立てれば、と願っております。



「子ども茶道教室」のひとつ

中国へ旅して、思ったこと

昭和会 尾崎隆繁

今年九月下旬より、妻と共に中国の北京市に住んでいる娘夫婦を訪ねて初めての中国旅行に出掛けました。

北京では、故宮や万里の長城を観光したり、中心街の王府井や、通り一帯が掛軸や絵を売っている琉璃廠でショッピングや食事もして少し下町の気分も味わいました。中心部から少し離れた所では、古い町並みを取り壊されて巨大なビルが建築されているのを見て歴史が失われて行くのを感じました。滞在中に娘の家族と三泊四日で洛陽市と西安市へ旅行をして多くの遺跡を見た中で、洛陽の龍門石窟で五世紀の終わりから約四百年間彫り続けられた約十万体の仏像群の規模と仏像の美しさは荘厳で心を洗われるような気持ちでしたが、所々、仏像が風化欠落しているのを目にして改めて遺跡保存の難しさを感じました。又、西安の兵馬俑博物館は、地元の農民が畑で井戸を掘っていて発見したのがきっかけで発掘されたそうで、約六千体もある陶製の兵馬一体一体の顔と姿が異なっているの手足などの細工の精

緻さ、規模の大きさに感動しました。

今回の旅行では中国の極く一部しか見ておりませんがそれでも、歴史の長さ、遺跡の巨大さ、文化の奥深さと先人の技術の高さには感嘆するばかりでした。私にとって今回最も印象に残ったのは漢字でした。中国は元々日本へ漢字を伝えた国であるのに日本と較べると随分省略した字形になっているので、ガイドに何時から現在の字形になったのか尋ねますと、一九六〇年代の半ばから約十年間続いた文化大革命以降のことでしたが、それにしても中国は日本文化の先達の国でもありルーツの文化が変質しつつあることに一抹の淋しさを覚えました。今中国では、開放経済の進展で、日本と同様に生活の安易や便利さを求めるあまり、古来より大切に受継ぎ守って来た文化と伝統を失いつつあるのではないかと思いますと共に我国でも先人が営々と築き上げた誇るべき文化と伝統を無関心の中で壊してしまっているのではないのでしょうか。

小学校の連合音楽会を聴いて

山崎児童合唱団

塚田美紀

今年は縁あって佐用郡の小学校連合音楽会の講評という仕事をいただきました。音楽会の開かれるホールへ向かう伝統のあるものでした。私の隣には第一回から携わってこられた方でした。昔の音楽会の様子を詳しくおしえていただきながら開演を待っていました。

会場は子供達と保護者そして学校関係の方で満員となり、熱気いっぱいでした。私は勝手にステージに上る子供は五十人以上ときめていたら、ほとんどの学校が三十人以下それも少ないところは六人、八人で来ていました。驚きでした。

全学校聴いた中で最も感動したのが六人で出場した僻地校でした。少ない人数でがんばっていることに感動したのでなく、演奏そのものが素晴らしいかったです。曲目はテレビでよく耳にする「情熱大陸」です。メロディラインは三人の女子が受け

持ち途中で息の合ったタンバリンも登場です。リズムは一人の男子がカッコ良くドラムセットをたたき、他の男子がラテンの打楽器をいくつも持ちかえて自信たっぷりに輝く目で演奏し、障害を持つている男子が先生の補助なしにみごとにウインドチャイムとマラカスを演奏していました。そこに音楽の先生のピアノが入り、とても素晴らしいアンサンブルが出来上がっていました。

私は六人ということも忘れた音楽と子供達の顔が素晴らしく感動で胸が一杯になってぼろりと涙がこぼれました。六人の子供達、それを指導された先生からいろんな事をおしえられた一日でした。

山崎児童合唱団も来年で三十周年を迎えます。子供達といっしょにやりたいことが山ほどありますが、練習時間等中々難しいこともあります。子供達の笑顔が山崎いっばいに広がるようにこれからもがんばっていきたいです。



民踊との出会い

さつき民踊グループ

中野 みつる

私と民踊の出会い、九年余り前、秋のふれあい文化祭を観賞し、参加されていた、皆様方の踊りのすばらしさに魅了され、元来盆踊り等が好きであった私、私も踊ってみたいという虫に火が付いて、友達と二人で「さつき民踊グループ」の門を叩き入会させていただきました。

仲間に入れていただいた喜び以上の驚きは、グループの指導をして頂いている方が坂東流坂東寿賀幸岸本幸子という高名な先生であるということでした。

以来週一回の稽古は、なるべく休まないようにし、グループの先輩方の足手まといにならないように努力しております。

おかげで一つ一つものになることが出来、春・秋の文化会館での発表や、近隣の老人介護施設よりお招きを受け、ボランティアでの踊りの場を与えて頂くことに感謝し、会員の「和」と健康を願い、気持ちよく稽

古に行かせてくれる家族に感謝しつつ、少しでも上達し、一人でも多くの方に喜んでいただける踊りが出来るよう精進しようと思っております。



水の都ベネツィア

山崎美術協会

福岡 久藏

水の都ベネツィア。人口が三十万人余りの小さな観光都市です。

これまでに、私は二度いったことはありますが、ゴンドラで運河を周遊したこと、ガラス工房とサン・マルコ寺院の見学くらいでした。

今回はベネツィア滞在型のスケッチ・ツアーがあり、期待に胸ふくらませて参加しました。

ベネツィアは大きな潟に、百余りの小さな島があり、それらを四百余りの橋でつなぎ合わせて造った海上都市です。ここは車の乗り入れが禁じられていて交通機関はもっぱら舟です。救急車も消防車もすべて船です。ピーポー、ピーポーといって走っています。バスもタクシーも船。一週間滞在するホテルはサンタ・ルチア駅近くで、ローマ広場の直ぐ傍でした。水上バスの始発駅もそこにあり大変便利でした。

滞在は七日間というのに、二日目と三日目が雨に祟られました。しか

し、私はスケッチの用具とカメラを持って出掛けます。雨の降り様がすごくて何もできません。仕方なく魚市場に入り、雨を避けスケッチを始めましたが、色の乾きが悪く、色が重なりと濁ってしまい、冴えない絵ばかり量産しているようで虚しい感じがしました。ただ、良かったのはベネツィア最大の大理石の太鼓橋（リアルト橋）。いつもなら人波で橋の様子など見えないのですが、吹き降りのせいで人の行き来がなく、全景を見ることができました。

四日目からは晴天。朝早くホテルを出、街の中心サン・マルコ広場へ急ぎました。広場の周囲には黄金の教会マルコ寺院、その隣にはドウカレ宮殿、高さ九十七メートルのレンガ色の大鐘楼、そして、時計塔や博物館等が取り巻いています。海へ出ると客待ちのゴンドラが所狭しと並んでいます。

ロマンの都ベネツィア。近年、地盤沈下が激しく、街への浸水が深刻化しているといえます。カラフルで美しいこの街を子や孫にも残してやりたいものと思うのですが。

古いこと新しいこと

味のこ

山崎邦楽邦舞研究会

竹壯会 石野和雄

新緑の木々も夏を過ぎていつしか木の葉も色づき、山の姿も錦模様となりました。時の流れは早く一刻の休みもなく動いています。早朝の山道を一人歩いていると、様々なことが次々と浮かんできます。

芸の道について思うとき、初めから現在のかたちがあるのでなく、それ以前のことがあるのではなく、その形が出来たのだと、何の道でもみな同じことだと思われま。音楽も同じこと、古典を最初にしっかりやって基礎が出来た後に新曲をやればよいのであって、いきなり新曲から入ると、砂上の楼閣のように不安定なものになると思われま。科学もしかりした基礎の上に積み重ねてこそ立派な成果が得られるものです。

音楽の世界でも音に味がなければ本当のよい音とは聞こえま。唯楽譜の通り忠実に音を出すのなれば、機械の方が正確に出来ることでし

う。

しかしそれでは一見よく出来ているように聞こえても演奏者の心が入っていない音では、何とも味気ない気がします。音楽も演奏者によって同じ曲でもみなその味が違い奏者の個性も出ま。それは言葉では表現するのがむずかしいことです。又古いものは何でも時代おくれのように扱わず、大切にしたいものです。古いものの中には良いところもたくさんあっても、今時のテンポに合わない敬遠され勝ちです。一見地味なようでもよく噛めば噛む程良い味が出ま。それはするめのようなものです。

それともう一つ何事も継続すること、何より大切なことです。やれば結果は後からついてきま。あせらず続けることが、早い成果は期待出来ませんが、大成するものと思われま。

小鳥の鳴き声や松籟を聞きつゝ山道を一人こんなことを瞑想し乍ら歩くのも私の日課の一つ朝の始まりです。



私と詩吟

山崎詩舞道連盟

宗範 小川賀尉(登)

私が詩吟を始めたのは、昭和三十年代の初めの頃と思います。私の信用組合が正木法隆先生の寓居(本宅は船越山常福院)に隣接していた関係で、先生の御宅によく御邪魔に上がっていました。其所へ賀堂流中国本部会長の松垣賀陽先生が東京からの帰り道、必ず立ち寄られました。其所で松垣先生にお目に掛かり、吟詠並に漢詩を教えて頂きました。

松垣先生は御承知のように、日本吟剣詩舞連盟の常任理事であり、同連盟の会長、笹川静江先生の右腕と言われた御方であります。其の意味では、詩吟の本家本元の教えを受け、総元の流れを汲むと申しても過言ではないと思います。又、縁あってヴォックスレコード吟詠会の専属吟詠家にもなっています。

山崎詩舞道連盟も七団体、三十四名の会員を擁していると思います。昭和三十四年代の最盛期には、数百名も、千人近くも会員がいたのではないかと思います。詩舞道連盟だ

けで「大会」を開き、其所へ歌謡曲や、舞踊の会の皆様にも参加して頂いていたと思います。現在は文化協会の一部に詩吟や扇舞の会が加わっています。文化協会には沢山の団体が集まっています。地域文化全体が発展し、向上していると思います。結構な事です。将に隔世の感があります。

私も詩吟を始めてから「半世紀」以上たちま。詩歌吟詠道賀堂流の最高位「宗範」の格を許されています。篠乃丸吟詠会の会長をはじめ、西播詩吟会の会長、兵庫県吟詠連盟の相談役等々を歴任させて頂きました。現在も年一回は篠乃丸吟詠会の総会を兼ねた、吟剣詩舞大会を開催しています。

山崎文化協会の御発展を祈念し乍ら、報告書の筆を置きます。

春待つところ

山崎町合唱連盟

藤井七代

長らく歌い継がれて来ました町民合唱。以前を知る方より「人数が少ないですね。」と御指摘を受けたり致します。今のところ会員の身体上、家庭上の都合があり、しばらく休会止むなしの方があつたりして最低会員数に少々翳りがあります。会員増が一同の願いです。

栗山祐子・長井美江、奥野昌子の各先生方より熱心な御指導を受けておりますが、あと一步中々難しいところ。長年ハーモニーを培ってきた仲間、練習には和気あいあいとした雰囲気があります。毎回の選曲も素晴らしくて歌い終えた後の感激は言葉には言い尽せん。

この曲を歌う事ができ、良かったと感謝の念が募ります。

ハーモニーって素晴らしいですねといわれる所以でしょう。

閑話休題

町民合唱の練習について

指揮指導

栗山祐子先生

ピアノ伴奏 長井美江先生

楽譜初見指導 奥野昌子先生

練習 月二回 ②④火曜日

時間 午後七時半より九時頃迄

場所 聖旨保育園保育室

発表の出場ステージは原則として

I 三月第一日曜日

「しその森合唱祭」

YOB（代表 片山澄之先生）と

組み混声合唱となります。

II 十一月三日

「秋のふれあい文化祭」

以上の事を御納得の上、町民合唱へ御入会下さる方を心より御待ち申し上げます。よろしくお願い致します。

連絡先 町民合唱事務担当

山崎町山田 木下豊子さん

電話 〇七九〇（六二）〇一〇三



和太鼓教室

に入って

播州山崎太鼓

大久保 愛海

私は小学三年生の時に、お母さんにすすめられて、和太鼓教室に入りました。

見学に行った時は簡単そうに見えたけど、いざ始めてみると、太鼓をたたいても、なかなか大きな音が出せませんでした。そして、最初のころは、手にたくさんまめもできていたかったです。

リズムを覚え始めてからは、先生に、てっぺいに指どうしてもらったり、友達にも教えてもらったりして、少しずつ太鼓をたたく事になっていきました。

そして、初めてたくさんのお客さんのいるぶ台で演そうした時は、とてもきん張しました。でも、何回かぶ台で演そうしていくうちに、あまりきん張もなくなり、少しずつだけど、自信がわいてきました。

そして今年の六月から、和太鼓教

室子ども部は、初級と中級の部にわかれてする事になり、私は、中級の部に希望して入りました。中級の部は、今までよりも、むずかしくなり、みんなについていけるか不安もあったけど、お父さんやお母さんの応援もあり、何よりも自分がんばろうと思う気持ちが大きかったので、今も楽しく、つづけています。できればこの先ずっと、大人になっても和太鼓をたたいていきたいなあって考えています。



こけだま 苔玉づくり

播磨さつき会

田口 實

年に一度の『やまさき文化』の原稿を書くとき、いつものことながら、さて何を書くのかなと思いつき過去を振り返ってみても盆栽という歴史はあっても、実際に私達が鑑賞できるに至ったのが約半世紀に過ぎない。

山崎文化協会が設立されて以来、加盟団体の一員として多くの方々のご指導、ご協力を戴きながら今日までお付き合いが出来ることを嬉しく思っております。

私達播磨さつき会の運営は時代と共に、いかなる活動目標を掲げて、実行には移し難く、近年特に高齢化による会員の激減と外来種の草花がホームセンターなどで、ところ狭しと多種多様、見るからにきれいだなあーと目に付くのが一般の方々の感じられるところであり、ポットで育てられ、しかも安価、プランターに種々の寄せ植えができ、人それぞれにアイデアが出される楽しみなど

老若を問わず女性の軽作業で立派に栽培できるのが人気の集中するところだと思っています。

サツキ（盆栽）づくりだと挿芽をして、二年目に植え替え、その後は愛好者の努力で作品化されるものだから少なくとも十年を経なければ作品らしきものにはなりません。

最近ではミニ盆栽として花木の苔玉づくりがブームになりつつあります。ポットや小鉢で根が込んできて植え替え時期の迫ったものを、根土の形を整える程度に解し、外に出ている根もある程度整えてから、ケト土で押さえて水ゴケを張り糸でコケがくずれないように縛って下さい。

また一方、花木の時期をみて根土を完全に洗い落として成育に必要な根以外は整理して水ゴケで根づくりをしてからケト土で包んで苔を張って仕上げるもの、先にコケだけで丸くつくり上げたものに材料に見合っただけの穴を中心部に開けて挿し込んでつくることもできます。後は受け皿などに飾って水管理を上手にすることが大事です。

手軽で場所も広くとらないミニ盆栽をお試し下されば幸いに思います。

地域文化に 貢献する平成会

平成会

稲用 博史

平成会は、平成元年、「地域文化の発展に貢献する」という目的を持って結成されました。

私たちは、この目的を達成するために、

①具体的に地域文化に貢献する事業を縦系に、②会員の自己研鑽と相互の親睦をはかる事業を横系にして、活動しています。

①縦系になる「地域に貢献する事業」には、毎年行われる事業と五年ごとに行われる記念事業があります。毎年行われているのは、平成会農園での芋掘り事業と山崎八幡神社でのカウントダウン事業です。

平成会農園での芋掘り事業は、毎年六月に行われ、山崎町内の幼稚園・保育園の子供達を収穫にお招きしています。

山崎八幡神社でのカウントダウン事業では、十二月三十一日、沢山のキャンドルを立て、大晦日から来られる参拝者の方々に年越しそばを振る舞っています。

今年の五月例会では、「山崎八幡神社元禄能舞台コンサート」をさせて頂きました。これは、市内の有能な演奏家の方々の協力をいただきました。平成会の月例会企画の新しい方向性を示しています。

五年ごとに行われる記念事業には、五周年での「関西学院大学グリークラブ演奏会」、十周年での「和太鼓一路演奏会」、十五周年での「全盲のテノール歌手新垣勉演奏会」がありました。再来年の二十周年に向かって、モチベーションを高めているところですよ。ご期待下さい。

②横系になる会員の自己研鑽としては、講師をお招きして講演をお願いする講師例会があります。講師は、会員が工夫して講師を選んでお願いしていますが、会員の職種が多様なに対応して、多彩な講師の方々に講演して頂いています。

もう一本の横系、会員相互の親睦としては、家族旅行も企画され、家族ぐるみのつきあいの場になっています。

これらの縦系と横系で、皆様に喜んで頂ける織物を創り上げようと、会員みんなが力を合わせて活動しています。

和の歌声

山崎民謡連合会

小学六年生

菅原恵理

私達は、民謡を習う前は、古くさい変な歌だと思っていました。ですが習い始めてみたら、これが和風の歌なんだ、こういう歌い方がいい所なんだと思うようになり、この題を選びました。

民謡を始めて八年間。小さいころの自分の「行きたい」と言った一言で、今の自分があるんだと思っています。時には、自分の思うように歌えない時もあったりして来たけど、先生は、「先生だっていつでもしっかり」と歌えるわけじゃない。だから練習するんだよ」と言ってくれました。

いっしょに練習している人達は、とてもやさしくて、舞台で歌った後には、「恵理ちゃん、しっかり歌えていたよ」と言ってお下さるので、ちゃんと歌えなかった時でも、少しホッとします。

いっしょに習っている愛ちゃんは、習い始めて、三年目なのにとっても上手で『私もがんばらないとなー』っ

て思います。

時には、イヤになることも、つまずくこともあると思うけど、これかも愛ちゃんとがんばっていききたいです。

中学一年生

朝見愛

私は、歌う前、何度もつばを飲み込みます。

緊張しているではありません。のどの調子を伺っているのです。

「今日は声が出るかなー」って…

(少し緊張しているかも?)恵理ちゃんのように、山っ子会の人達といつでもニコニコ笑って上がらないようにしている笑顔を見て、私もマネして笑ったり話したりしています。

石田先生は、そんな私たちにそして他の会の人達にも話かけて上がらないようにして下さいます。それを見て、私も目標が決まりました。

『先生のようになろう』その時、緊張が「スウーッ」と消えました。

これから大会に沢山出て、歌って、又、練習して…。時間がとても早くすぎて行くけれども時間にさからわず、自分の歌い方、自分の生き方での歌声を全国、地球全体に広めて行きたいと思います。もちろん、恵理ちゃんというライバルと一緒に…。

川柳破丸会

山田酔仙

世の中の事、私達自身周辺の事への想い、考えを、斜めから反対側から五七五の歌にした川柳を毎月集まって選句し賑やかに楽しんでいます。ワクにはまらない、川柳に嵌ると、色々こじつけ 川柳破丸会としました。

新品に取り替えたいなアレとアレアルコール匂い付けたい胃カメラに

岸本 新風

殺虫剤撒いてる妻見て虫逃げる

二人づれ薄い頭と厚化粧

香山 釣遊

足す水にメダカ尾鰭で礼を言い

その先の話し促し茶を入れる

是兼 芽吹

一日の旅の疲れで二日寝る

閉店まで人生いろいろ話す客

志水亀の子

飲むつもり酒にのまれて人殺す

露天風呂上がる間際に美女来たる

清水 三省

合併で知らぬ地名にナビ狂い

少子化を生まない人が嘆いている

田中 万来

夜中起き陽と共に寝て薬飲む

ずいぶんと選んだ言葉で言ったのに

尻に火が付いても螢元気です

靖国の談議核にて軽く飛び

谷口 柳幸

痩せたなら入ると買った服が増え

痛むとこ治す体操で筋肉痛

谷口 遊愉

強敵は味覚の秋と意思の無さ

ダイエットもったい無いが邪魔をす

千本 花夢

春風がビニール袋で逃避行

便利さを操作出来ない不便あり

千本 風筧

観覧車乗ってはみたが目をつむり

垣根越し見ではならじがつい覗き

中津 水香

楽しみにしてた結果先言われ

お医者さん好きな物から禁止する

板東 笑雅

雰囲気が悪いと感じ孫素直

パソコンに役目交代ペンと筆

山本 山水

乳飲み子がじっと見ているラブシー

ン

監督も選手も涙 花粉症

山田 酔仙

松井良通君を悼む

山崎文化協会副会長
山崎美術協会 会長

福岡 久藏



故 松井叔生 画伯

画家、松井叔生。本名、松井良通君が亡くなりました。生前、言っていた芸術院会員にならないまま逝ってしまっ、それで良かったのですか。心残りはありませんか。

松井君、あなたにとって、この山の国「宍粟」は生涯の支えだったようですね。だから田舎者だが「何かをやってやるぞ。負けないぞ。」があったのでしょうか。

あなたが山崎高校を卒業して、進んだ大学は武蔵野美術大学でした。

この武蔵美は伝統があり、オーソドックスな東京美大に対して、「何んぞ、負けるか。」があったようです。

当時の先生、特に山口長男先生や阿曾三郎先生が自由でモダンな新しい抽象の世界をどんどん広められていたのに、あなたは憧れもし虜になったのでしょうか。二十歳代のあなたの絵は三角や四角や丸の連続模様の中で彷徨されていたように私には思えました。

美大を卒業すると、反文展、反日展を旗印として創設した二紀会に入会しました。二紀会でのあなたは、卒業時の昭和三十三年に努力賞、昭和三十三年には佳作賞を受賞し、その後も昭和四十年に二紀同人賞をと、とんとん拍子に進んでいたようですが、その頃でしょうか病に倒れたのは。

その後、二紀会の代表、宮本三郎氏や田村孝之介氏などの影響を受けたのでしょうか。作風ががらりと変わり、人物や人形を題材とし、抽象から具象への変身となりました。学生時代からデッサン力には優れたものをもっていただけに、魚が水を得たように、透き通るような人肌の表現をするなど、どんどん作品を制

作しました。当時、若かった山本文彦氏らと刺激あい競いあって年を重ねてきたことと思います。

昭和五十二年と五十八年に二紀会菊華賞を受賞しましたし、昭和六十二年には念願だった文部大臣賞を受賞するなど、本当にこれからというところだっただけに残念でなりません。また、あなたは知己の多い方でしたので色々とお世話もしていただけるものと思っていましたのに。

でも、あなたからいえば、反骨一途に一生を終えることができたという満足感を味あうことができたのでしょうか。どうぞ、安らかに眠り下さい。

この宍粟の地からあなたの意志を継ぎ、翔く若人がでてくることを信じ お別れの言葉といたします。



休息の刻 宍粟市山崎文化会館蔵

「松井先輩と…」

富和 昭弘

十九歳の時上京、武蔵野美術大学に入学した春に、柏餅の入った小さな包みをぶらさげて、文京区の大塚公園近くの先輩の住まいを訪れたのが始まりで、以後、四十七年間にいたる長い交遊だった。

(その一)

「こいつなー、俺の後輩なんや／＼それも幼稚園、小学校、中学校、高校と、おまけにムサ美までや／＼めずらしいやろ、よう面倒みてやってな／＼」おかげさまでさまざまな作家、画廊等々を紹介していただきました。

(その二)

「どや、見合いしてみいへんか」「歌舞伎座で会って、帝国ホテルで飯を食うならしてもええで」「あほ云うな…それでどんなんがええんや」「そやなー、山田五十鈴の娘みたいなんがええわ」「嵯峨なんとかいう娘かいなー、…もう世話するんあほらしなってもた」その後、見合い話はゼロでした。

(その三)

「鎌倉に引越すけど、手伝うてくれへんか」「そろええけど、又むずかしいこと云うんやろ!」「道順やけどな、今月は方位が北が吉方で反対方向かもしれんけど一応北に向かって出発、それから西方面へ向かってから鎌倉街道へ出よか」「そんな道あらへんで」「ほしたら一週間ほど延ばそか」

(その四)

「お前、も不惑の年を越したんやからこれから年は四捨五入で数えようや、今日から同級生やからナ」「それもええけど四年たったら十級上の先輩になるで」「その時は今ままでおりや」

(その五)

「お前、カミサンにどないいうて出て来たんや」「先輩に出てこいと云われて……」「なんや、後輩が相談することがあるからと、云うてるから行ってくるわ……と云うて出たんやけど」「悪い先輩、後輩なのネ。ママにも一杯頂戴ネ……ハイ、カンパーイ」

(その六)

「先輩の今年の絵、紫から緑に変わったけどなんかあったん」「心境の変化や!」「それにしても、もう

少し顔だけでも現代風なモデルを使うほうがええんとちがうん」「ええやんけ、もみじ山のイメージや俺の原風景や」最後までもみじ山を愛した先輩でした。

(その七)

「兄貴が死んでもうて、ほんまに天涯孤独になってしもうたわ!老後よろしくたのむで」「ほんなら、ぎょうさん財産作っておいてや、相続税で赤字になったら困るから」「あほ云うな、墓地もちゃんと用意したんや、墓石はかっこええ形に彫刻してや」

思い出はつきない。ふと気がつけば今日は初七日になる。そのうちに寂しさが湧き起こってくるだろう。

合 掌



爽 快 宍粟市山崎文化会館蔵

松井画伯の訃報

本年一月末、全く思いがけず、当町ご出身の松井叔生氏の訃音に接しました。

会員の皆さまもご存知のように、松井氏は中央画壇の二紀会で活躍、文部大臣賞をはじめ数々の受賞に輝いた洋画家で、先年当町西信で、昨夏には神戸市で個展を催しておられます。

当誌は松井氏と親交のあったお二方にお願ひして追悼記を寄せて頂き、謹んで弔意をささげることになりました。

追悼記の一人は、山崎文化協会副会長であり当誌の表紙絵、挿絵の画家として皆様お馴染みの福岡久藏氏で、松井氏とは山崎高校の同級で共に研鑽を積まれた間柄です。

もう一方は富和昭弘氏です。

山崎町出身の彫刻家で日本建築美術工芸協会の富和氏は、大阪万博のサブプロデューサーを務められたり全国の有名な建築物の構想やモニュメントの製作にあたってこられました。

また三十年間、画家岡本太郎氏の助手をつとめられたが今は東京都千代田区に、平成十年設立された富和

創造計画研究室を拠点に活動しております。

お住居は鎌倉市で寄稿文通り、松井画伯とは長年の交友があったお方です。

(浅 田)



宍粟市山崎文化会館 綴帳

宍粟市山崎文化協会

役員及び団体名

会長	藤井 慧乗
	副会長 長川 耕一
理事	藤村 清一
	伊野 操治
理事	福岡 久藏
	春名 俊夫
理事	井口 武一
	町 悦子
理事	浅田 耕三
	栗山 節子
理事	竹添 和彦
	谷川 ヒデ
理事	伊野 操治
	山崎郷土研究会
理事	山崎植物同好会
	山崎文学会
理事	山崎歌人協会
	山崎囲碁同好会
理事	山崎茶華道協会
	山崎謡曲同好会
理事	山崎郷土芸能保存会
	昭和会
理事	山崎児童合唱団
	山崎俳人協会
理事	さつき民謡グループ
	山崎美術協会
理事	山崎邦楽舞研究会
	山崎詩舞道連盟
理事	山崎町合唱連盟
	播州山崎太鼓
理事	播磨さつき会
	平成会
理事	山崎民謡連合会
	川柳破丸会
事務局長	安井 克典
	前野 良造
同次長	井口 武一
	事務局長

会計 西川 佳代
教育委員会 岩路 貴裕
(敬称略・順不同)

「やまさき文化」編集委員

編集長 浅田 耕三
委員 荒木 俊介
芦田 八重
井口 武一
栗山 節子
長川 耕一
北川 泰子
藤村 清一
町 悦子
前野 良造
岩路 貴裕

事務局だより

昨年度の山崎文化協会の研修旅行として岡山県の勝山町(真庭市)の町並み・町づくり活動を見学してきました。勝山町は歴史・地理・産業面で山崎町と類似点が多い町ですが、古い町並みとよく合う家々の暖簾や空き家を利用した無料休憩所、家々に眠っているお雛様を外から見えるように展示したお雛祭りなど、特長的な町づくりを進めており季節を問わず観光客が多く訪れています。このような町づくりを中心になって進められた方が「観光のためでなく住民が楽しむために始めた町づくりです。」とおっしゃっていました。

山崎町も一昨年から藤まつり時期を中心に、山崎の特長ある町並みや

文化財、文化活動をもう一度見直そうと「山崎ウォーキング&ウォッチング」事業が住民主体で立ち上がり、また昨年は第一回「山崎もみじ祭り」が開かれました。地域にある文化や見所を地域に住む方々が知り、楽しむ機会を提供して下さっています。

昨年、宍粟市総合計画が発表されました。今のままでは十年後の宍粟市の人口は三万七千四百人と、合併時から十四%も減る予想になっています。それを八%程度に抑え四万人確保を目標に設定されているようです。『無いものねだりより、あるもの探し』宍粟には魅力的なものがいっぱいある。』と言われますが、最大の『あるもの』は宍粟で生まれ育った『人材』だと思えます。その『人材』が『出て行きたくない』、『一時出ていても戻ってきたくなる』ような町づくりこそが人口減少抑制に最も効果のある施策であり、若い人たちにとても魅力的で興味の持てる文化の育成が不可欠だと思います。これまで培われてきた宍粟の文化を若い世代の人々にも伝え発展・継承してもらおう一方、若い世代によって作り出される新たな文化もどんどん増えていくような土壌にしなければなりません。

山崎文化協会としても、各加盟団体の活動をお互いに紹介し刺激しあえるような情報交換の場を、若い世代の人々に伝わりやすいようなツールも駆使して構築し、地域文化振興

を図る一助としたいと考えています。よろしくご協力下さい。

事務局長 前野 良造

編集後記

編集長 浅田 耕三
編集の最初の作業は各部の代表の方から出された生原稿を読むことです。一年間の各部の活動やさらなる抱負がうかがえ、今後の期待がふくらみます。

さて今号は大阪府立大学の田中先生の玉稿を頂きました。

ゆとり教育の実施等で子供の基礎学力が低下し、殊に理科学に対する学習意欲が衰退している憂うべき現状への先生のご提案はまことに傾聴すべき時宜を得た試案で、当誌に妙な花を添えて頂きました。

荒木さんの『シベリアに消ゆ』は、九州天草出身の女性の活躍と当時の北東アジアの国際情勢を描いたスケールの大きな社会性豊かな作品です。

表紙絵及びカットは今号も福岡さんの巧緻豊かな筆です。

「これを学ぶものはこれを愉しむ者に如かず」

文化協会の皆さんがそれぞれの道をたのしみ技倆を磨かれ、当誌がその豊かな文化のコミュニティーとなるよう一層のご協力をおねがいします。



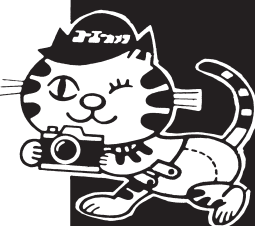
TOBISHI

飛石機械産業 からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で40数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、一人の人間として使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社掲げて取り組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

◆最新型カラー現像機導入◆
カラープリント・スピード仕上げ
良い品を・安く・安心して買える店



コニエカメラ Specialty Camera Shop

兵庫県山崎町東鹿沢26-3 本店 TEL (0790) 62-2089
咲ランド店 TEL (0790) 63-0533

料理旅館・割烹

創業 菊 水
文久元年

兵庫県宍粟市山崎町山崎 287

TEL (0790) 62-1119(代)

寿 幸せへの旅立ちに——。

ふじむら貸衣裳

宍粟市山崎町山崎181 TEL (0790) 62-0052

デンソー指定サービスステーション
自動車電装品整備・携帯電話代理店

K カメウチ電装株式会社

本社・工場 兵庫県宍粟市山崎町今宿 98-15

TEL (0790) 62-1607(代)

太子営業所・姫路営業所・神戸営業所・福崎店

用途に合わせて
にしん個人ローン
●住宅ローン ●フリーローン
●マイカーローン ●カードローン
●学資ローン

・豊かな老後生活のために
・資産の効率運用に
にしん個人年金保険
●定額年金保険
●変額年金保険



豊かな街づくりをお手伝いする

西兵庫信用金庫



<http://www.shinkin.co.jp/nisisin/>

一献献上 品質本位

まごころを伝えます。

TEL. 0790(62)1010
FAX. 0790(62)6218



確かな品質と味わい。



SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

環境と家計にやさしい給湯器!

CO₂
削減

光熱費
カット



省エネ大賞受賞・高効率ガス給湯器

省エネ基準
112%達成

ECOジョウ

お車と住まいの快適、なんなりと

ホンジョウ

(株)本條商店・ホンジョウプロパン(株)

本社 宍粟市山崎町中井 96

●石油・タイヤ・自動車用品 ●ガス・水道・住設リフォーム

☎0790-62-4321 ☎0790-63-1234

創業明治28年・さつき本舗



御菓子司
山崎

四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

本店：播州山崎町さつき通り (電)0790-62-0170
山田店：播州山崎町山田 (電)0790-62-0160
福崎店：福崎町西田原1177 (電)0790-22-7555



パソコン・OA機器・事務用品・スチール家具
各種修理・学校設備品・理化学機器



イトーオフィスサービス 株式会社

山崎町中広瀬117-12 夢公園南隣 TEL (0790) 62-0126